

であつた。

冷謙

壁上一羽の鶴

落した一葉の名刺

水瓶の中へ遁込む

冷謙は明の太祖に事へて音楽の事を主<sup>つかさど</sup>つてゐた。貧困な一友人が救済を求めに來たので謙は「一つ教へてあげるが、君往つて、二金だけ取れ、決して餘計に取つてはならぬよ。」と言ひつつ壁に一の門を畫いた。一羽の鶴が守つてゐる、友達に、其門を敲かせた、門が開いた。友人は其内へ入つて往くと、金銀、寶玉が燦然として眼を射るばかりである、友人は貪つて二兩の金は取らず、外の高價な珍玉寶石類を思ふさま取つた。出る時に名刺を落したのに氣がつかかなかつた。

宮中の寶藏に盜賊が入つたといふ騒ぎになつた。落ちてゐた名刺を證據に其名前の者を捕へて見ると、冷謙に關係があつた。で、冷謙も逮捕せられた。引かれて城門に入らむとする時、「俺はどうせ殺されるのだ、どうぞ水を一杯恵んでくれ」と頼むと、拘引者が水瓶に水を入れて與へた。謙は「ありがたう」と飲んで居たが、ひよいと足を水瓶に

捕瓶の儘で速

瓶の破片に冷謙の聲

薬の盛違ひから道に志す

突き込んで、すほりと體も入つて了つた。拘引者は驚いた。「君が出てくれなければ困るぢやないか、僕等も皆罰を受けることになる、どうぞ出てくれたまへ。」「かまは無くこのまゝ瓶を陛下の御前まで擔いで行きたまへ。」其れで御前に瓶が持出された。天子は親ら瓶に對つて勅問があつた。瓶の底からはつきりとした聲で冷謙は一々應答した。「瓶から出て來い、殺さないから。」と、仰せられたけれども、「私は罪があります、瓶から出られません」と申上る。天子はつひに怒つて「瓶を撃ちこわせ」と命ぜられた。侍衛の者は直に打碎いたが、冷謙の姿は見えず、瓶の缺片の一つ／＼に皆冷謙の聲がするのであつた。

薩守堅

薩守堅は蜀の西河の醫者だつたが、薬を盛り違へて人を死なしたので、業を棄てて道に志した。江南には三十代目の天帥・虚靜先生と、林、王二人の侍宸<sup>天師道</sup>の職名とが法徳秀れてゐるといふ事を聞き、其の教を受けたいと思ひ立ち故郷を出たもの、四川か

冷謙 薩守堅



一封の紹介  
状

ら棧道を渡つて陝西へ出て更に漢水を下り長江に入り、江西に行く大旅行なので、相應に準備して来た旅費も途中に盡きてしまった。まだ、先きは遠いのにどうしたものかと、心配しながら、とぼく歩いてみた。向から三道士がやつて来たが、此の姿を見て「何處に往くのか。」と訊いた。かくくの志望と有のまゝを話すと「其は氣の毒だ、天師は此程既に登仙された」といふ、薩はがっかりした。すると一道士が「後繼の新天師も道法高い方だ、俺は識つてゐるから紹介を書いてやらう、往つて訪ねるが可い」と手紙をくれ、又一術を授けた。

旅費捻出の  
秘術

「サア此の咒ひで大きな棗が出る、一個を七文に賣れ、一日に十個咒へば七十文あるから、旅費には澤山だらう。」  
外の道士も亦た、

「俺も教へてやらう、此れは櫻扇だ、此で煽げばどんな病人も直に癒る。」と扇を與れた。

「俺が授けるのは雷の法だ。」残りの一道士も秘傳を授けた。

三道士と別れて、これからは、棗を賣り病氣を治すので旅費の不自由をせぬばかりか、

龍虎山で皆  
傳を受く

到る處先生々々と尊敬を受けながら旅行が出来た。江西の貴溪縣龍虎山まで辿り着いて紹介狀を差出すと、「ああ虚靜天師の、親筆だ」と一家は慟哭するのであつた。手紙の中には「吾れ、林、王の兩侍宸と、薩某に遇うて各自一法を授けておいた、其地に往いたらば、總ての傳授をしてやる様に」とあつた。薩守堅の名は一時に高くなつた。

廟から逐ひ  
立てを食ふ

湘陰といふところに往つて城隍廟(城の土の地神)に數日寓居した。湘陰の太守の夢に城隍神が現はれ「薩先生が廟内に滞留せられるは自分に取つて窮屈であるから、何處ぞ然るべき處へ移してあげて貰ひたい」と頼んだ。大守は翌日薩を逐ひ立ててしまった。其處置振りがあまり、冷酷だつたので、薩守堅も癢にさはつた。四五十里立ち退いて行つた頃、豚を昇かいて來る者に遇うた、其は城内の城隍廟に願解ぐんげに往くのだつた。薩は少許の香を包んで渡し、「お前の願解が終つたら、どうぞ俺の香を香爐に焚たいてくれ」と頼んだ。其人が其の通りした。忽ち急雷鳴りはためき、閃電一撃して其廟を燬やしてしまつた。

報復の一香

其から三年経つた。薩守堅は或る渡し場で、船頭が居なくて困つた、しかたがないから自分で棹ささして渡つた、船賃の積りで三文の錢を、人も無い船の中に置いて手を洗あうてゐると、鐵冠紅袍の神が玉斧ぎよくよくを手にして水中に立つてゐる、薩は「何者か」と吐つた。

城隍神との  
確執



城隍神遂に  
屈服す

答へていふには『吾は湘陰の城隍神なり、先年、君、故なくして我が廟を焼かれしに依り、之を上帝に訴へたる處、帝は玉斧を賜はり、薩真人が天律を犯すことあらば其場に成敗を行つて可なりとの特許を得、真人に尾行すること已に三年に及べども、曾て犯律の事あらず、況んや今、錢を人なき船に置かれたるは、暗中にも人を欺かざる義行、ほとく敬服せり、今は君に怨を報ずるの念慮絶えたり、願はくば部將として召使ひ給はれ。』薩は『更に三年随つても同じ事ぢや。』と打笑つた。併し城隍神の願ひの趣は上帝の認可を經、以後部將として使役することになつた。

後年、福建地方に遊び種々奇蹟を顯はした。一日諸將環侍の中に『天帝の召あり』と言つて、身を起し、立つたるままに仙化した。

張 三 丰

元末から明にかけての有名な仙人は張三丰である。張は遼東の人で名は君實、字は玄玄といつた。目が圓く耳が大きく、身の丈七尺鬚髯が針を植ゑた様な異相であつた。手

寒暑とも一  
笠一衲

一旦假葬さ  
れ本葬の時  
種へる

に刀尺を持ち寒暑とも一笠一衲で通してゐた。一日に千里行くこともあるが、多くは靜かに坐してゐて十日間も動かぬことがある。食物は一度に十人前も平げ、又は數月間絶食することもある。

元の末に寶鷄金臺觀といふ所に在つて、一旦世を辭してしまつたので、棺に納めて假葬式をして置いて、此度本葬をしようといふ段になると生き返つた。明の洪武年間には太和山に到つて修煉し、小庵を玉虚宮の前に結んだ、其の庵前に五本の古樹があつた、張は其の下が好きだつた。暫くするうちに此邊には今まで多くあつた猛獸、鷲鳥の害が無くなつた、張仙人の威力だと人々は尊信した。後、武當山に入つた。此の後或は隠れ或は現れる。

王 嘉

王嘉は重陽子と號す、常に鐵籠を携へて乞食してあるき、藍田、登州、崑崙の三ヶ處を往來してゐた、其隨行者は馬銜、譚玉、劉處玄、邱處機で、此等は皆其傳道の弟子で

王 嘉

王の四友



あつた。重陽子の死後は馬銜が其の教を嗣ぎ、譚と劉と邱が繼いで宗盟と爲つた。馬銜は丹陽子と號し、譚玉は長眞子と號し、劉處玄は長生子と號し、邱處機は長春子と號した。

吐裏飢

賈はぬ乞食

通州の街に一人の乞食が現はれた。杖に瓢をぶらさげ、衣はぼろ／＼鞋は底脱け、加之瘡を病んで不潔で臭くてたまらない、通行人は皆鼻を掩うて道を避けた。乞食は平氣で人の顔を視つめて「肚が飢い／＼」といふ。錢を與れる人があれば辭る、食物を與れても受けない。多分あれは狂人だらうと人は噂してゐた。

三日ばかりさうしてゐた。

米屋の小僧が昇天する

あまり同じことをいうて歩くので、うるさくもあり、穢くもあるので、城外に追拂はうとすると、乞食は「俺の肚が飢いばかりだ、皆さんに干係つたことではないぢやないか。」と言つて、一層聲高に「肚がひもじい」と呼びつゞけた。忽ち米屋の一少年が飛び出して來て、乞食の前に跪き「どうぞ先生、私を度(仙人さな)して下さい」と禮拜し

た。乞食は大笑して兩手を舉げて人々に對し「俺が今、李機を度するのだぞ」といひつゝ、少年を引かゝえて空に舞ひ昇つてしまつた。李機は少年の名である。市中に芳香が薫じて數日消えなかつた。

萬鐘

少年行倒れを救ふ

餓死は男兒の恥に非ず

明の文學士萬鐘といふものは、世間を莫伽に見て、作すこともなく放浪生活を續け、蜀の山中へ入つた時、五日間食物にあり付かず、遂に巖の下で行倒れとなつた。處が恍惚となつて居る間に一少年が現はれ親切に介抱して生き返らせ「どうして行倒れなどになつたか」と笑つて居る。萬鐘きまりが悪く「私は山西のやくざもので、數十年學問をしたが、妻子を養ふことも出來ず、放浪の結果野垂れ死をしようとした譯です、助けて戴いて面目ありません」と羞らふと、少年は「何かまふものですか、孔子は陳で餓死する處だつた。韓信は淮陰の婆さんに握飯を貰つて命を繼いだのぢやありませんか。」



少年は懷中から二枚の煎餅を出してくれた。食べて見ると忽ち満腹し、精神充實するを覺えた。その時少年は

『どうです、吾々の仲間になりませんか、どうせ功利世界の人ではない様だ、』といふ。『どうぞ』と少年に随つて、鳥ならでは通はぬやうな巖崖を攀ちて、山を越え森を潜つて、清冽な流れを廻らした山陰の一茅屋に着いた。

少年の紹介で一老人に會はされた。白髮秀眉、朱唇玉顔、目を閉ぢて端坐して居た。

少年は『この方は吾々の師、藺石先生と申し上げる方です』と教へた。先生は目を開いて『ア、お前か、善く來た』と少年を顧みて、『マア此の境内を一通り案内したら善からう』と言はれたので、萬鐘は少年に連れられて山中見物に出かけた、奇峰怪石、珍草芳花、幾多の勝景を見て、一石室へ着いた。竹編の床があり、藤蔓の蔽ひがあり、厨子のやうな形の室であつた。少年は『此處が吾々の息を養ひ形を煉る所だ。四方の山脈の集まつて居る爲めに冬も寒からず、夏も暑苦しくない。雨風の害もない所だ』と説明してくれた。

四壁は白い石が嵌めてあつて、その面に人の姓名を澤山彫り付けその人名を獸、鳥、

養息煉形の  
道場

官吏は獸類  
の部に入る

蟲と三部類に分けてあつた。讀んで行くと蟲の部中に萬鐘の姓名があつたのでギョツとして少年に問ふと『これは皆藺石先生の弟子の名だ』といふ。『この部分は何ういふ譯ですか』曾て朝廷の官職に就いた者は獸の部に入れてある。それは出で、は人を噬み、飽いては山に還り、その性、獸に同じいからである。科擧には及第しても仕官しない者は鳥の部に入つて居る。朱文公が云つた——廉を説かせれば、廉を説き、義を説かせれば義を説く、けれども實行に及んでは廉も義もない。鳥が物言ふのと同じだ——からだ。また白髮頭になるまで、學問をして、それで一生飯が食へず、秋の蟲のやうに鳴くのは蟲の部だ。先生が此處に彫り付けられた譯は、弟子共をして、昔の事を忘れさせぬ爲めなのだ』と説明してくれた。少年の説明に依ると、先生は食物を食へず、氣を吸うて生を保つこと巳に三千年、地行仙といふのであつて、少年自身は吳の褚といふ者で、度々試験に落第し、罰を蒙つたのが癪に觸り、學を棄て、山に入り今や百二十年になつたといふことであつた。萬鐘が郷里山西へ歸つた時は巳に百年も經つて居たが、若い時の色艶が少しも變らぬので、郷里の者には何ういふ人か判らなかつた。



猪 無 糟

三八〇

猪 無 糟

王といふ婆さんは酒を醸つて賣つてゐた。一道士がよく来て飲んだ。曾て錢を拂はないが、婆さんも別に催促もしなかつた。ある日、道士は

『いつもたゞばかり飲んで氣の毒だな、うめあはせに井戸を掘つてやらう。』

さう言つて庭前を少し掘つた、忽ち水が湧き出した、其が皆醇酒であつた。婆さんは少々心許なかりながら、其井戸の酒を賣つて見た、客は皆『此れは滅法にうまい酒だな、今迄のよりもすつと好い。』と賞めぬものは無かつた。婆さんは元手いらすで大儲け、またたくうちに大身代になつた。

三年も経つてから、道士が久振りにやつて來た。

『どうだネ、酒は。』

『おかげ様で、大變良い酒ですが、たゞネ困るのは猪にやる糟が無くてネ。』  
道士は笑つて、其家の壁に大書した。

慾には限がない

天高不<sub>レ</sub>算<sub>レ</sub>高 人心第一<sub>高</sub>

井水<sub>做<sub>レ</sub>酒賣</sub> 還道猪無糟

道士は忽ち見えなくなつた。井戸から酒の出るのも止んだ。

### 嶗山道士

嶗山は勞山とも罕山とも書く、山東省即墨縣内(今の青島の東北二里より起る一山嶽)に在り、黄海の海岸に峙つ高山で、秦の始皇、漢の武帝などが求仙に志して、東海沿岸を探検した際の古蹟がある。山中の幽邃な區域には道廟寺院などがあつて、今も修道の士が隠棲してゐる。

高密(即墨の隣縣)の張生は勞山の或る道觀にこもつて讀書をしてゐた。其處に薪取りや何かの勞役に服する、形貌怪醜な老道士があつた。張生は別に其老道士を尊敬するわけもなく唯だ其の職役相當に、いはゞ輕視してゐたのであつた。

或る時、山で二頭の牛を買つたが、家まで百里許もあるので、送るのに困つてゐたところ、

嶗山道士

三八一

始皇武帝の探検古蹟



「君は何か考へてゐる様だが、牛のことだらう、俺が送つてやるよ。」  
 老道士が妙なことを言ふぐらゐに思つたが、つひ、其牛が見えなくなつた。後に、家に歸つたが、二頭の牛が届いてゐた家人に其の始末を訊くと、老道士が送つて來たので、其時刻は張生が勞山で牛の話をした時なのである。是れで非常の人であることを知つて、爾後張生は老道士に大に敬意を表することになつた。

張生が或る日山中の人々に易の講義をしてゐた。老道士は窓の外から立聽してゐたが、聲をかけて、「君のいふのは皆俗説だよ。」といふ。試みに彼に説かせて見ると、すべて解釋が意表に出ることばかりであつた。張生はほとく敬服して、此から老道士を師として易の教授を受け、他日張生は山東に於て易學を以て有名になつた。

大雷雨の晩に、張は窓隙から外面を覗いて見たが、數百の天將が老道士の房を圍繞んで敬禮をしてゐるやうである、驚き怖れ、息をひそめて夜を過した。曉になつて雨が罷んだ、老道士の處を窺つて視ると居なかつた。此の夜山中の道觀數十百處皆老道士を見たといふ。

みんな俗説だよ

附 録





老

子 周李耳撰。老子姓は李名は耳、一に聃と云ふ。

莊

子 周莊周撰。周は蒙の人、孟子と時を同うす。

列

子 周列禦寇著。禦寇は鄭人、遺者八篇は久しく散佚し、晉人張湛之を輯む。

禮

記 四十九篇。孔子の弟子及び後の學者の記する所を輯む。

淮

南 子 漢淮南王劉安撰。安は漢高祖劉邦の孫。海内の學者を集め、本書を撰す。

史

記 漢司馬遷著。上黃帝より下漢武帝までを記す。

枕

中 書 晉葛洪著。號稚川、六朝時代神仙家中の代表的人物にして、

本書及び抱朴子、其他神仙に關する著書多し。

搜

神 記 晉干寶撰。本書の外晉記三十卷を撰す。

搜

神 後記 晉陶潛撰。潛一名は淵明。續齊諧記 梁吳均著。宋の東陽無疑の齊諧記に續きて、神怪の寓言を書す。

博

異 記 唐谷祥子著。

酉

陽 雜俎 唐段成式著。成式は校書郎とて、奇篇秘籍多し、燕翼貽謀錄 宋王林撰。上建隆より下嘉祐に至る興廢得失を論ず。

五

雜 俎 明謝在杭著。

湧

幢 小品 明朱國禎輯。清許叔平著。

拾

遺 記 晉王嘉著。嘉は苻秦の方士。

長生久視の道

治人事天莫若嗇。夫唯嗇是謂早服。早服謂之重積德。重積德則無不克。無不克則莫知其極。莫知其極可以有國。有國之母可以長久。是謂深根固抵。長生久視之道。(老子)

小國寡民。使有什伯人之器而不用。使民重死而不遠徙。雖有舟輿。無所乘之。雖有甲兵。無所陳之。使人復結繩而用之。甘其食。美其服。安其居。樂其俗。隣國相望。雞狗之聲相聞。民至老死不相往來。(老子)

北冥の大魚

北冥有魚。其名爲鯤。鯤之大。不知其幾千里也。化而爲鳥。其名爲鵬。鵬之背。不知其幾千里也。怒而飛。其翼若垂天之雲。是鳥也。海運則將徙於南冥。南冥者天池也。齊諧者志怪者也。諧之言曰。鵬之徙於南冥也。水擊三千里。搏扶搖而上者九萬里。去以六月息者也。野馬也。塵埃也。生物之以息相吹也。天之蒼蒼。其正色耶。其遠而無所至極耶。其視下也。亦若是則已矣。且夫水積也。不厚則



最小の生命

負大舟也無力。覆杯水於坳堂上。則芥爲之舟。置杯焉則膠水淺而舟大也。風之積也。不厚則其負大翼也無力。故九萬里。則風斯在下矣。而後乃今培風。背負青天而莫之天闕者。而後乃今將圖南。蜩與鸞鳩笑之曰。我決起而飛。槍榆枋。時則不至而控於地而已矣。奚以之九萬而南爲。適莽蒼者三餐而反。腹猶果然。適百里者宿春糧。適千里者三月聚糧。之二蟲又何知。小知不及大知。小年不及大年。奚以知其然也。朝菌不知晦朔。蟪蛄不知春秋。此小年也。楚之南有冥靈者。以五百歲爲春。五百歲爲秋。上古有大椿者。以八千歲爲春。八千歲爲秋。而彭祖乃今以久特聞。衆人匹之。不亦悲乎。(莊子逍遙遊篇)

太極の先六極の下

夫道有情有信。無爲無形。可傳而不可受。可得而不可見。自本自根。未有天地。自古以固存。神鬼神帝。生天生地。在太極之先。而不爲高。在六極之下。而不爲深。先天地生。而不爲久。長於上古。而不爲老。稀韋氏得之以挈天地。伏戲得之以襲氣母。維斗得之終古不滅。日月得之終古不息。堪坏得之以襲

崑崙。馮夷得之以遊大川。肩吾得之以處太山。黃帝得之以登雲天。顓頊得之以處玄宮。愚強得之立乎北極。西王母得之坐乎少廣。莫知其始。莫知其終。彭祖得之上。及有虞。下及五伯。傳說得之以相武丁。奄有天下。乘東維。騎箕尾。而比於列星。(同上大宗師篇)

神を拊いて雀躍す

雲將東遊過扶搖之枝。而適遭鴻蒙。鴻蒙方將拊脾雀躍而遊。雲將見之。倘然止。贊然立曰。叟何人邪。叟何爲此。鴻蒙拊脾雀躍不輟對雲將曰。遊。雲將曰。朕願有聞也。鴻蒙仰而視雲將曰。吁。雲將曰。天氣不和。地氣鬱結。六氣不調。四時不節。今我願合六氣之精。以育群生。爲之奈何。鴻蒙拊脾雀躍掉頭曰。吾弗知。吾弗知。雲將不得問。又三年東遊過有宋之野。而適遭鴻蒙。雲將大喜。行趨而進曰。天忘朕邪。天忘朕邪。再拜稽首願聞於鴻蒙。鴻蒙曰。浮遊不知所求。猖狂不知所往。遊者執掌以觀無妄。朕又何知。雲將曰。朕也自以爲猖狂。而民隨予所往。朕也不得已於民。今則民之放也。願聞一言。鴻蒙曰。亂天下之經。逆物之情。玄天弗



人を治するの福

成。解獸之群。而鳥皆夜鳴。災及草木。禍及昆蟲。治人之過也。雲將曰。然則吾奈何。鴻蒙曰。噫。毒哉。僊僊乎歸矣。雲將曰。吾遇天難。願聞一言。鴻蒙曰。噫。心養汝徒。處無爲而物自化。墮爾形體。吐爾聰明。倫與物忘。大同乎溟溟。解心釋神。莫然無魂。萬物云云。各復其根。而不知。渾渾沌沌。終身不離。若彼知之。乃是離之。無問其名。無闕其情。物固自生。雲將曰。天降朕以德。示朕以默。躬身求之。乃今也得。再拜稽首。起辭而行。(同上法篋篇)

井兼者の好む所

刻意尙行。離世異俗。高論怨誅。爲亢而已矣。此山谷之士。非世之人。枯槁赴淵者之所好也。語仁義忠信。恭儉推讓。爲修而已矣。此平世之士。教誨之人。遊居學者之所好也。語大功立大名。禮君臣。正上下。爲治而已矣。此朝廷之士。尊王疆國之人。致功并兼者之所好也。就藪澤。處間曠。釣魚間處。無爲而已矣。此江海之士。避世之人。間暇者之所好也。吹呶呼吸。吐故納新。熊經鳥申。爲壽而已矣。此導引之士。養形之人。彭祖壽考者之所好也。若夫不刻意而高。無仁義而

彭祖壽考者の好む所

修。無功名而治。無江海而間。不導引而壽。無不忘也。無不有也。澹然無極。而衆美從之。此天地之道。聖人之德也。(同上刻意篇)

夢の六候

覺有八徵。夢有六候。奚謂八徵。一曰故。二曰爲。三曰得。四曰喪。五曰哀。六曰樂。七曰生。八曰死。此者八徵。形所接也。奚謂六候。一曰正夢。二曰噩夢。三曰思夢。四曰寤夢。五曰喜夢。六曰懼夢。此六者。神所交也。不識感變之所起者。事至則惑。其所由然。識感變之所起者。事至則知其所由然。知其所由然。則無所怛。一體之盈虛消息。皆通於天地。應於物類。故陰氣壯。則夢涉大水。而恐懼。陽氣壯。則夢涉大火。而燔灼。陰陽共壯。則夢生殺。甚飽則夢與。其饑則夢取。是以以浮虛爲疾者。則夢揚。以沈實爲疾者。則夢溺。藉帶而夢蛇。飛鳥銜髮則夢飛。將陰夢火。將疾夢食。飲酒者憂。歌舞者哭。(列子)

夢の陰陽

昔者仲尼。與於蜡賓。事畢。出遊於觀之上。喟然而嘆。仲尼之嘆。蓋嘆魯也。言偃



在側曰。君子何嘆。孔子曰。大道之行也。與三代之英。丘未之逮也。而有志焉。大道之行也。天下爲公。選賢與能。講信脩睦。故人不獨親其親。不獨子其子。使老有所終。壯有所用。幼有所長。矜寡孤獨廢疾者。皆有所養。男有分。女有歸。貨惡其棄於地也。不必藏於己。力惡其不出於身也。不必爲己。是故謀閉而不興。盜竊亂賊而不作。故外戶而不閉。是謂大同。今大道既隱。天下爲家。各親其親。各子其子。貨力爲己。大人世及以爲禮。城郭溝池以爲固。禮義以爲紀。以正君臣。以篤父子。以睦兄弟。以和夫婦。以設制度。以立田里。以賢勇知。以功爲己。故謀用是作。而兵由此起。禹湯文武成王周公。由此起。其選也。此六君子者。未有不謹於禮者也。以著其義。以考其信。著其有過。刑仁講讓。示民有常。如有不由此者。在執者去。衆以爲殃。是謂小康。(禮記禮運篇)

夫魚相忘於江湖。人相忘於道術。古之真人。立於天地之本。中至優游。抱德煬和。而萬物雜累焉。孰肯解構人閭之事。以物煩其性命乎。(淮南子)

太微者太一之庭也。紫宮者太一之居也。軒轅者帝妃之舍也。咸池者水魚之囿也。天阿者羣神之闕也。四宮者所以爲司賞罰。(淮南子)

桓公讀書於堂。輪人斲輪於堂下。釋其椎鑿。而問桓公曰。君之所讀書者何書也。桓公曰。聖人之書。輪扁曰。其人焉在。桓公曰。已死矣。輪扁曰。是直聖人之糟粕耳。桓公怫然作色而怒曰。寡人讀書。工人焉得而譏之哉。有說則可。無說則死。輪扁曰。然。有說。臣試以臣之斲輪語之。大疾則苦而不入。大徐則甘而不固。不甘不苦。應於手。厭於心。而可以至妙者。臣不能以教臣之子。而臣之子。亦不能得之於臣。是以行年七十。老而爲輪。今聖人之所言者。亦以懷其實。窮而死。獨其糟粕在耳。故老子曰。道可道。非常道。名可名。非常名。(淮南子)

自齊威宣之時。騶子之徒。論著終始五德之運。及秦帝而齊人奏之。故始皇採用之。而宋忌正伯倚充尙羨門子高。最後。皆燕人。爲方仙道。形解銷化。依於鬼神



之事。騶衍以陰陽主運。顯於諸侯。而燕齊海上之方士。傳其術不能通。然則怪迂阿諛苟合之徒。自此興。不可勝數也。自威宣燕昭使人入海求蓬萊方丈瀛洲。此三神山者。其傳在渤海中。去人不遠。患且至則船風引而去。蓋嘗有至者。諸僊人及不死之藥皆在焉。其物禽獸盡白。而黃金銀爲宮闕。未至望之如雲。及到三神山反居水下。臨之風輒引去。終莫能至云。世主莫不甘心焉。及至秦始皇并天下。至海上。則方士言之不可勝數。始皇自以爲至海上而恐不及矣。使人乃齎童男女入海求之。船交海中。皆以風爲解。曰未能至望見之焉。其明年始皇復游海上。至琅邪。過恒山。從上黨歸。後三年。游碣石。考入海方士。從上郡歸。後五年。始皇南至湘山。遂登會稽。並海上冀遇海中三神山之奇藥。不得。還至沙丘崩。(史記封禪書)

童男童女皆風解

祠竈穀道郤老の方

李少君亦以祠竈穀道郤老方見上。上尊之。少君者。故深澤侯舍人。主方。匿其年及其生長。常自謂七十。能使物郤老。其游以方徧諸侯。無妻子。人聞其能使

數百歲前的事物を語る

物及不死。更饋遺之。常餘金錢衣食。人皆以爲不治生業。而饒給。又不知其何所人。愈信爭事之。少君資好方。善爲巧發奇中。嘗從武安侯飲。坐中有九十餘老人。少君乃言與其大父游射處。老人爲兒時。從其大父。識其處。一坐盡驚。少君見上。上有故銅器。問少君。少君曰。此器齊桓公十年。陳於柏穴。已而案其刻。果齊桓公器。一宮盡駭。以爲少君神。數百歲人也。少君言上曰。祠竈則致物。致物而丹砂可化爲黃金。黃金成。以爲飲食器。則益壽。益壽而海中蓬萊仙者乃可見。見之。以封禪則不死。黃帝是也。臣嘗游海上。見安期生。安期生食巨棗。大如瓜。安期生僊者。通蓬萊中。合則見人。不合則隱。於是天子始親祠竈。遣方士入海求蓬萊安期生之屬。而事化丹砂諸藥。齊爲黃金矣。居久之。李少君病死。天子以爲化去。不死。而使黃鍾史寬舒受其方。求蓬萊安期生莫能得。而海上燕齊怪迂之方士。多更來言神事矣。(同上封禪書)

洪。歷觀天地之寶藏。上智之宮第。至上之尊。神仙圖記。猶未知極妙之根。以去



羅浮山中神人降つて葛洪に妙言を口授す

月乙丑夜半。靜齋於羅浮山。忽驚風駭起。香馥亂芳。龍鳴虎嘯。躑躅空中。有頃之間。紫雲覆林。忽見一真人。眼瞳正方。項負圓光。天顏絕世。乘白麟之車。建九旒之節。腰帶瓊文鳳繡之錦旒。頭戴六通之冠。年可二十許。侍者執夜光之火玉。羽衛可有千人。自號元都太真王。問曰。子是葛洪乎。何爲而希長存。洪稽首披陳。長跪執禮。神告余曰。子是籍九天之嘉慶。乘運挺英。復千年之後。太清有仙伯之名。今當遠變去世。卜宅西鄉。相携於太華之上。丹宮之中。且還時朝。以龍淵代身密乎。寂往莫識。今真子窮翫墳典。聰秀逸羣。解滯悟惑。可謂妙才矣。但未知真仙之宮第。上聖之所由耳。吾今行矣。相告計其事。不復爲久世。洪因伏叩頭。於是真人。卽令侍者。執筆擘紙。口授妙言。既畢。左手授與洪云。吾往方丈簡仙官。致復相過。子勗之焉。吾去矣。見駕乘冉而高。乃失所在也。(枕中書)

天地渾沌の中有元始天王あり

真書曰。昔二儀未分。溟滓鴻濛。未有成形。天地日月未具。狀如雞子混沌。玄黃已有。盤古真人。天地之精。自號元始天王。遊乎其中。溟滓經四劫。天形如巨蓋。

天地形成の順序と天の發生

上无所係。下无所依。天地之外。遼屬無端。玄元太空。無響無聲。元氣浩浩。如水之形。下無山嶽。上無列星。積氣堅剛。大柔服維。天地浮其中。展轉無方。若無此氣。天地不生。天者如龍。旋迴雲中。復經四劫。二儀始分。相去三萬六千里。崖石出血。成水。水生元蟲。元蟲生演牽。生剛須。剛須生龍。元始天王在天中心之上。名曰王京山。山中宮殿。並金玉飾之。常仰吸天氣。俯飲地泉。復經二劫。忽生太元玉女。在石澗積血之中。出而能言。人形具足。天姿絕妙。常遊厚地之間。仰吸天悉。號曰太元聖母。元始君下遊見之。乃與通氣結精。招還上宮。當此之時。二氣網羅。覆載氣息。陰陽調和。无熱无寒。天得一以清。地得一以寧。並不復呼吸。宣氣合會。相成自然。飽神。大道之興。莫過於此。結積堅固。是以不朽。金玉珠者。天地之精也。服之則與天地相畢。元始君經一劫。乃一施太元母。生天皇。十三頭。治三萬六千歲。書爲扶桑大帝東王公。號曰元陽父。又生九光元女。號曰太真西王母。是西漢夫人。天皇受號十三頭。後生地皇。地皇十一頭。地皇生人皇。九頭各治三萬六千歲。聖真出見受道。天无爲。建初混成。天任於令所傳。三皇天文。是此所

太元聖母と元始君との交觀



三皇五常既  
に澆末に近  
づく

宣。故能召請天上大聖及地下神靈无所不制。故天真皇人三天真王駕九龍之輿是也。次得八帝大庭氏庖羲神農祝融五龍氏等。是其苗裔也。今治五嶽是故道隆上代弊極三王三夏禹殷湯周武也。是以淳風既澆易變而禮興禮爲亂首也。周末陽弱而陰強國多寡婦西戎金兵起而異法興焉。既而九州湮沒帝業荒蕪此言驗也。後來方有此事道隆之代其人混沌異法之盛人民猾僞也。洪曰此事元遠非凡學所知。吾以庸才幸遭上聖眇目論天地之奧藏暢至妙之源本。輒條所誨銘之于素以爲絕思矣。夫無心分之人慎勿以此元始告之也。故置遺跡示乎世之賢耳。(同上)

天上神仙の  
首都玉京山

真記曰。元都玉京。七寶山。週迴九萬里在大羅之上。城上七寶宮。宮內七寶臺。有上中下三宮。如一宮城。一面二百四十門。方生八行寶林。綠葉朱實。五色芝英。上有萬千千種芝。沼中蓮花。徑度十丈。上宮是盤古真人元始天王太元聖母所治。中宮太上真人金闕老君所治。下宮九天真皇三天真王所治。玉京有八十一萬天路。

億萬里を往  
くこま一歩  
の如し

通八十一萬山嶽洞室。夫以得道大聖象。並賜其宮第。居宅皆七寶。宮闕或在名山。山嶽羣真所居。都有八十一萬處。古今有言九九八十一。是終天路玉京山也。上仙受天任者。一日三朝。元都太真人也。雖有億萬里。往還如一步耳。世人安知此哉。衆仙或有日三朝扶桑公。或三朝西王母。玉京金闕。是太上真人。月三朝元始天王。太上真人。元始之弟子。皆知帝王有司徒丞相也。金闕老子。太上弟子也。扶桑大帝元始。湯之氣。治東方。故世間帝王之子應東宮也。(同上)

萬物生育の  
母

西漢九光夫人。始陰之氣。治西方。故曰木公金母。天地之尊神。元氣煉精。生育萬物。調和陰陽。光明日月。莫不由之。精神長存。命則天終。抱一不離。故能長久。天失陰陽。水旱不節。人失陰陽。神根命竭。世人不能保一守三。修生反死。固其宜矣。可後怨耶。吾復千年之間。尙招子登。太上真闕朝。宴玉京也。此電頃未足爲久。今且可浮遊五嶽。採靈芝。尋隱仙之友。逍遙無爲。吾言信可望哉。(同上)



扶桑大帝。住在碧海之中。宅地四面。並方三萬里。上有太真宮。碧玉城。萬里多生。林木。葉似桑。又有樾樹。長數千丈。二十圍。兩同根偶生。更相依倚。名爲扶桑宮。第象玉京也。衆仙天量數。元洲方丈。諸羣仙未昇天者在此。去會稽岸六萬里。太清仙伯太上丈人所治。蓬萊山對東海之東北岸。山週迴五千里。溟海中。濤浪衝天。九氣丈人所治。崑崙元圃。金爲墉城。四方千里。城上安金臺五所。玉樓十二。瓊華之屋。紫翠丹房。七寶金玉。積之連天。巨獸萬尋。靈香億千。西王母九光所治。羣仙無量也。(同上)

廣成丈人。今爲鐘山真人。九天仙王。漢時四皓仙人。安期彭祖。今並在此輔焉。

(同上)

容成子。力墨子。爲岷山真人。今元子五子。爲岷山侯。太昊氏。爲青帝。治岱宗山。顓頊氏。爲黑帝。治太恒山。祝融氏。爲赤帝。治衡霍山。軒轅氏。爲黃帝。治嵩高

山。金天氏。爲白帝。治華陰山。(同上)

隋侯の珠

沙邊の一小蛇を救ふ

一珠を遺つて恩を報ず

一杯の酒千日の醉

昔隋侯。因使入齊。路行深水沙邊。見一小蛇。可長三尺。於熱沙中宛轉。頭上血出。隋侯見而愍之。下馬以鞭撥於水中。語曰。汝若是神龍之下。當願擁護於我。言訖而去。至於齊國。經二月還。復經此道。忽有一小兒。手把一明珠。當道送與。隋侯曰。誰家之子。而語吾。答曰。昔日深蒙救命。甚重感恩。聊以奉贖。侯曰。小兒之物。詎可受之。不顧而去。至夜又夢見小兒持珠與侯曰。兒乃蛇也。早蒙救護生全。今日答恩。不見垂納。請受之。無復疑焉。侯驚異。迨旦見一珠在床頭。侯乃收之。而感曰。傷蛇猶解知恩重報。在人反不知恩乎。侯歸持珠進納。具述元由。終身食祿耳。(搜神記)

狄希中山人也。能造千日酒。飲之亦千日醉。時有州人姓玄名石。好飲酒。欲飲於希家。朝日往求之。希曰。我酒發來未定。不敢飲。君石曰。縱未熟。且與一盃得否。希聞此語。不免飲之。既盃復索曰。美哉。可更與之。希曰。且歸。別日當來。只此



墓の中で酒醒む

一盃可眠千日也。石即別。似有作色。旋至家。已醉死矣。家人不知。乃哭而葬之。經三年。希曰。玄石必應酒醒。宜往問之。既往石家。語曰。石在否。家人皆怪之曰。玄石亡來。服已闋矣。希驚曰。酒之美矣。而致醉眠千日。計日今合醒矣。乃命家人鑿塚破棺看之。即見塚上汗氣徹天。遂命發塚。方見張目開口。引聲而言曰。快哉。醉我也。因問希曰。爾作何物也。令我一盃大醉。今日方醒。日高幾許矣。墓上人皆笑之。被石酒氣冲入鼻中。亦醉臥三月。世人之異事。可不錄乎。(同上)

老樹の神異

昔武王時。雍州城南。有一大神樹。約高十丈。周廻一里。蔭其地土。人民悉奉。四時八節。牽羊負酒。祭祀不絕。武王出城見衆奉獻。王言。此樹神何須損我百姓。乃以兵圍。正欲誅伐之。乃有神。飛沙走石。雷電霹靂。武兵起衆。瓦解星分。無令得近。時有一人被傷損脚。去樹一百步臥地。不能自去。迨夜有一人着朱衣乘馬。與樹神曰。朝來武王伐子。不有損乎。樹神曰。我雷公飛沙走石。傷武王兵士。兵士見之。星分不敢近我。我有威力如此。赤衣人怒曰。我教武王兵。人用生

朱塗面。披髮着朱衣。赤繩縛之。道灰百匝。以斧伐之。豈不損乎。樹神默然不對。赤衣人忽然縱轡而去。至明。軍人向鄉中父老語之。以狀聞王。王遂依其言。用物以斧伐之。並無變動。伐樹將倒。樹中流血。變作一牴牛。向趾中走。入豐水中。故樹精百年。化作青牛。後人學之。用灰及赤。(同上)

東方朔行方不明なる

漢武帝與越王爲親。乃遣東方朔泛海求寶。惟命一周廻。朔經二載。乃至。未至問。帝問左右。朔久而不至。今寰中何人善卜。對曰。有孫賓者。極明易筮。帝乃更庶服潛行。與左右賚絹二疋往卜。叩賓門。賓出迎而延坐。未之識也。帝乃啓卜。卦成。知是帝。惶懼起拜。帝曰。朕來覓物。卿勿言。賓曰。陛下非卜他物。乃卜東方朔也。朔行七日必至。今在海中。面西招水大嘆。到日請話之。至日朔至。帝曰。卿約一年。何故二載。朔曰。臣不敢稽程。探寶未得也。帝曰。七日前卿在海中。面西招水大嘆何也。朔曰。臣非嘆別事。嘆孫賓不識天子。與帝對坐。因此而嘆。帝深異之。(同上)

邊に帝の起居を知る



異人に隨つて山に入る

虞郷獵人張可思。多力射。每逐獸入山。經絕壁下。雪中尋鹿。險阻絕遠。忽見人蹟。踐履絕異。驚愕久之。卽宛其蹤。入危僻窮途。蹟盡。抵一崖。一人攀緣。分明歷歷。可思愈懷驚異。因又登一崖。乃有榜引大枝。橫構岩上。視其人已度。可思亦隨度。廣平顯敞。不類山中。俄至洞側。見泉周石塔。塔下葦簾中。有大石堂。堂內烟火薰灼。烹爨甚宜。可思詣前。適見自外者負鹽一囊。約百許斤。致之厨下。滌袴濯足。因邀可思就火。俄聞磬聲。皆曰。諸眞登堂矣。卽遣可思拜謁。可思就昇。見金人玉人在左右。而身長丈餘。皆衣鶴氅。儀狀嚴美。聲音朗暢。皆謂可思曰。何出至此。晏天。可思卽述其來。遂坐可思於地。遍問人間之事。既而謂可思曰。爾可記吾短章。傳之於代。亦可稍增其壽。詞曰。天清地寧。人獨營營。名利奔迫。喜怒交爭。思永厥壽。彌喪其身。何不絕欲。端守爾精。言訖。謂可思曰。可速歸舍。無滯於此。當有譴責。可思聞語。便卽拜辭。於是命負鹽者送出。卽尋舊逕而歸。他日可思復來。道途乖矣。(同上)

汝の精を守れ

鬼神の有無

永熙年中。青州從事檢校尙書兵部郎中王宗仁者。羈遊河北時。僕射李公鎮守。宗仁與李公有族兄之分。而接之甚厚。因話鬼神之事。而李公謂爲冥昧有無難測。宗仁曰。有可信矣。何疑焉。如要明之。便可立頃召致。李公因所請之。宗仁曰。公可率意暗書逝者名氏。識之付某。當卽遣召。公先從鄴中大將。從兄弟澠學。陣傳射時。澠始亡。公方軫念。卽密書其名氏以付之。宗仁乃命香火迎風而嘯。遂以其名就焚于爐。良久向門驚視。遽起揮揖曰。在左右間。當爲通報。因謂公曰。不令輕召大將。宜速備酒食。盡敬辭謝之。公如其言。致敬久之。乃曰。幸已去矣。必欲見者。可更召平賤之輩。縱來無害也。時公宅內新襲青衣。因書其名字付之。要當見矣。宗仁復命香火迎風而嘯。卽以其名就焚於爐。頃刻笑語。公曰。如此老婢。追之何爽。公大奇之。因命詢問幽冥之事。宗仁曰。固不可泄。泄之當兩滅其算耳。久而遣去。宗仁常語公曰。某終當爲國相。但得石勒劉聰爲主。非若三台之正位也。其後宗仁以青州梓主人卒後。因爲隴右公納之賓。

大將の出現に大恐懼



僚尋僧號。而宗仁爲左丞相矣。竟如其言。(同上)

強盜愛子  
殺し二驢を  
奪ふ

涇之北鄙人李德用。稽衣食自給。元嘉中年元夜。有二盜踰墻而入。皆執利刀。德用不敢枝梧。而室內衣裘遺無有。德用一子。名阿七。甫六歲。方眠驚。因叫有賊。爲盜所射。應弦而斃。德用廬外。有二驢紫色。亦爲攘去。遲明村人集聚。共商量捕逐之路。俄而阿七之魂。登房門而號曰。我死自是我命。那復多痛。所痛者永訣父家耳。遂怨泣。久之隣里會者。五六十人。皆爲泣涕。因曰。勿謀反逐。明年五月。當自送死。乃召德用。附耳告之名氏。仍期勿洩。俄春作將至。德用謀生汲汲。無容加意。泊麥秋。德用有麥半頃。伺收拾。晨有二牛。蹊踐狼藉。歸遍里中。曰。恣女傷暴我苗。我已繫之。牛主償責以購。不爾吾將詣宮焉。里中共往視之。皆曰。此非左側人之素蓄者也。俄有二客至曰。我牛也。昨暮奔迸。不虞至此。所損之苗。請酬陪價。而歸我蓄焉。里人共謂問所從來。買牛契書。其價乃紫色驢交致焉。德用卽悟阿七所言。及詢姓名。乃皆如阿七所報。因卽縛之曰。爾去冬射

死兒の靈犯  
人を示す

死吾子。盡吾財。者人也。二盜相顧不復隱。曰。天也命也。死不可追。卽述其故曰。我旣行劫殺。乃北竄甯慶之郊。謂事已久。因買牛將歸岐下。昨牛抵村北二千里。徘徊不進。伺夜黑過此。旣寐夢一小兒五六歲許。裸形亂舞。紛紜相迷。經宿方悟。及覺二牛之糜糲不斷。如被解釋。則已竄矣。(同上)

深中仙境に  
通ず

嵩高山北有大穴。莫測其深。百姓歲時遊觀。晉初嘗有一人。誤墮穴中。同輩冀其儻不死。投食于穴中。墜者得之。爲尋穴而行。計可十餘日。忽然見明。又有草屋。中有二人。對坐圍棋。局下有一杯白飲。墜者告以飢渴。某者曰。可飲此。遂飲之。氣力十倍。某者曰。汝欲停此否。墜者不願。停。某者曰。從此西行有天井。其中多蛟龍。但投身入井。自當出。若餓取井中物食。墜者如言。半年許。乃出蜀中。歸洛下。問張華。華曰。此仙館大夫所飲者。瓊漿也。飲食者。龍穴石髓也。(同上)

獵夫赤城に  
入る

會稽剡縣民。袁相根碩二人。獵經深山。重嶺甚多。見一羣山羊六七頭。逐之。經一



石橋甚狹而峻。羊去。根等亦隨渡。向絕崖。崖正赤壁立。名曰赤城。上有水流。下廣狹如匹布。剡人謂之瀑布。路徑有山穴。如門豁然而過。既入內甚平敞。草木皆香。有一小屋。一女子住其中。皆十五六。容色甚美。著青衣。一名瑩珠。一名□□。見二人至。忻然云。早望汝來。遂爲室家。忽二女出行。云。復有得婿者。往慶之。曳履于絕巖之上。行琅然。二人思歸。潛去歸路。二女追還。已知乃謂曰。自可去。乃以一腕囊與根等。語曰。慎勿開也。於是乃歸。後出行。家人開視其囊。囊如蓮花。一重去。一重復至。五葢中。有小青鳥飛去。根還知此。悵然而已。後根于田中耕。家依常餉之。見在田中不動。就視但有殼。乃蟬蛻也。(同上)

囊中から小  
青鳥

仙境に土着

榮陽人姓何。忘其名。有名聞士也。荊州辟爲別駕。不就。隱遯養志。常至田舍。人收穫在場。忽有一人。長丈餘。蕭疎單衣。角巾來詣之。翩翩舉其兩手。並舞而來。語何云。君曾見韶舞。不此是韶舞。且舞且去。何尋逐。徑向一山。山有穴。纔容一人。其人命入穴。何亦隨之入。初甚急。前輒闊曠。便失人。見有良田數十頃。何

遂懇作。以爲世業。子孫至今賴之。(同上)

南陽劉麟之。字子驥。好遊山水。嘗採藥至衡山。深入忘反。見有一澗水。水南有二石菌。一閉一開。水深廣不得渡。欲還失道。遇伐薪人。問徑。僅得還家。或說菌中皆仙方靈藥。及諸雜物。麟之欲更尋索。不復知處。(同上)

長沙醴陵縣有小水。有二人乘船取樵。見岸下土穴中。逐水流出。有新斫木片。逐流下。深山中有人跡。異之。乃相謂曰。可試如水中。看何由爾。一人便以笠自障入穴。穴纔容人。行數十步。便開明朗。然不異世間。(同上)

平樂縣有山。臨水巖間有兩目。如人眼。極大。瞳子白黑分明。名爲目巖。(同上)

晉穆哀之世。領軍司馬。濟陽蔡詠家狗。夜輒群衆相吠。往視便伏。後日使人夜伺



有一狗著黃衣白脰。長五六尺。衆狗共吠之。尋跡定是詠家老黃狗。即打殺之。吠乃止。(同上)

一尾の白龜  
を買ふ

晉咸康中。豫州刺史毛寶。戍郟城。有一軍人。於武昌市。買得一白龜。長五寸。置瓮中。養之。漸大放。江中。後郟城遇石氏敗。赴江者莫不沈溺。所養龜人。被甲投水中。覺如墮一石上。須臾視之。乃是先放白龜。既約岸廻顧而去。(同上)

臟腑を取出  
して洗ふ尼

晉大司馬桓溫。字元子。末年忽有一比丘尼。失其名。來自遠方。投。溫爲檀越。尼才行不恒。溫甚敬待。屛之門內。尼每浴。必至移時。溫疑而窺之。見尼裸身揮刀。破腹出臟。斷截身首。支分鬻切。溫怪駭而還。及至尼出浴室。身形如常。溫以實問。尼答曰。若逐凌君上。刑當如之。時溫方謀問鼎。聞之悵然。故以戒懼。終守臣節。尼後辭去。不知所在。(同上)

野雉の交合  
を見て病癒

高平郝超。字嘉賓。年二十餘。得重病。盧江杜不愆。少就外祖郭璞。學易卜。頗有經驗。超令試占之。卦成不愆曰。案卦言之。卿所恙尋愈。然宜于東北二十里上官姓家。索其所養雄雉。籠而絆之。置東簷下。却後九月景午日午時。必當有野雌雉。飛來與交合。既畢。雙飛去。若如此。不出二十日。病都除。又是休應。年將八十。位極人臣。若但雌逝雄留者。病一周方差。年半八十。名位亦失。超時正羸。篤慮命在旦夕。笑而答曰。若保八十之半。便有餘矣。一周病差。何足爲淹。然未之信。或勸依其言。索雄果得。至景午日。超臥南軒之下。觀之。至日晏。果有雌雉。飛入籠。與雄雉交而去。雄雉不動。超歎息曰。管郭之奇。何以尙此。超病逾年乃起。至四十。卒于中書郎。(同上)

神人吏の妻  
に婚ふ

廬陵巴邱人陳濟者。作州吏。其妻獨在家。常有一丈夫。長大儀貌端正。著絳碧袍。采色炫耀。相期於一山澗間。至於寢處。不覺有人道。相感接。比隣入觀其所。至輒有虹見。(同上)



襄陽徐陽病死。夜忽崛起。將婦臂上金環脫去。明日復蘇。婦問故。陽云。吏持吾去。多見行貨得脫者。即許。便放令還。(同上)

西王母の使  
の一黃雀  
鳥に搏たる

宏農楊寶。性慈愛。年九歲。至華陰山。見一黃雀。為鷓鴣所搏。逐樹下。傷癥甚多。宛轉復為螻蟻所困。寶懷之以歸。置諸梁上。夜聞啼聲甚切。親自照視。為蚊所齒。乃移置巾箱中。啖以黃花。逮十餘日。毛羽成。飛翔朝去暮來。宿巾箱中。如此積年。忽與群雀俱來。哀鳴遶堂。數日乃去。是夕。寶三更讀書。有黃衣童子。曰。我王母使者。昔使蓬萊。為鷓鴣所搏。蒙君之仁愛。見救。今當受賜南海。別以四玉環與之。曰。令君子孫潔白。且從登三公。事如此環矣。寶之孝。尤聞天下。名位日隆。子震。震生秉。秉生彪。四世名公。及震。葬時有大鳥降。人皆謂真孝招也。蔡邕  
昔日黃雀(續齊諧記)  
報恩而至

口中より妻  
を吐出す

陽羨許彥。于綏安山行。遇一書生。年十七八。臥路側。云。脚痛求寄鵝籠中。彥以為戲言。書生便入籠。籠亦不更廣。書生亦不更小。宛然與鵝鵝並坐。鵝亦不驚。彥負籠而去。都不覺重。前行息樹下。書生乃出籠。謂彥曰。欲為君薄設。彥曰。可。口中吐出一銅奩。奩中具諸飾饌珍羞方丈。其器皿皆銅物。氣味香旨。世所罕見。酒數行。謂彥曰。向將一婦人自隨。今欲暫邀之。彥曰善。又於口中吐一女子。年可十五六。衣服麗綺。容貌殊絕。共坐宴。俄而書生醉臥。此女謂彥曰。雖與書生結妻。而實懷怨。向亦竊得一男子同行。書生既眠。暫喚之。君幸勿言。彥曰善。女子於口中吐出一男子。年可二十三。亦穎悟可愛。乃與彥叙寒溫。書生臥欲覺。女子口吐一錦行障。遮書生。書生乃留女子共臥。男子謂彥曰。此女子雖有心。情亦不甚。向復竊得一女人同行。今欲暫見之。願君勿洩。彥曰善。男子又於口中吐一婦人。年可二十許。共酌戲談甚久。聞書生動聲。男子曰。二人眠已覺。因取所吐女人。還納口中。須臾書生處女乃出。謂彥曰。書生欲起。乃吞向男子。獨對彥坐。然後書生起。謂彥曰。暫眠遂久。君獨坐當悒邪。日又晚。當與

妻更に情夫  
を吐く



君別。遂吞其女子諸器皿。委納口中。留大銅盤。可二尺廣。與彥曰。無以謝君。與君相憶也。彥大元中。爲蘭臺令史。以盤餉侍中張散。散看其銘題云。是永平三年作。(同上)

武丁織女に召さる

桂陽成武丁。有仙道。常在人間。忽謂其弟曰。七月七日。織女當渡河。諸仙悉還宮。吾向已被召。不得停。與爾別矣。弟問曰。織女何事渡河去。當何還。答曰。織女暫詣牽牛。吾後三年當還。明日失武丁。至今云。織女嫁牽牛。(同上)

半底に雞犬の聲を聞く

神龍元年。房州竹山縣陰隱客家富。莊後穿井。二年已濬一千餘尺。而無水。隱客穿鑿之志不輟。二年外一月餘。工人忽聞地中雞犬鳥雀聲。更鑿數尺。傍通一石穴。工人乃入穴探之。初數十步。無所見。但捫壁而傍行。俄轉會如日月之光。遂下其穴。下連一山峯。工人乃下於山。正立而視。乃別一天地。日月世界。其山傍向萬仞。千巖萬壑。莫非靈景。石盡碧琉璃色。每巖壑中。皆有金銀宮闕。有大樹。身如竹。有節葉。如芭蕉。又有紫花如盤。五色蛺蝶。翅大如扇。翔舞花間。五色鳥

天桂山宮に迷ひ込む

大如鶴翺翔乎樹杪。每巖中有清泉一眼。色如鏡。白泉一眼。白如乳。工人漸下至宮闕所。欲入詢問。行至闕前。見牌上署曰。天桂山宮。以銀字書之。間兩閣內各有一人驚出。各長五尺餘。童顏如玉。衣服輕細。如白霧綠煙。絳唇皓齒。鬢髮如青絲。首冠金冠而跣足。顧謂工人曰。汝胡爲至此。工人具陳本末。言未畢。門中有數十人出。云。怪有昏濁氣。令責守門者。二人惶懼而言曰。有外界工人不意而到。詢問次。所以未奏。須臾有緋衣一人傳敕曰。敕門吏禮而遣之。工人拜謝未畢。門人曰。汝已至此。何不求遊覽畢而返。工人曰。向者未取。儻賜從容。乞乘便而言之。門人遂通一玉簡。入旋。而玉簡却出。門人執之。引工人行至清泉眼。令洗浴及澣衣服。又至白泉眼。令與漱之。味如乳甘美甚。連飲數掬。似醉而飽。遂爲門人引下山。每至宮闕。只得於門外。而不許入。如是經行半日。至山趾。有一國城。皆是金銀珉玉爲宮室。城樓以玉字題云。梯仙國。工人詢曰。此國如何。門人曰。此皆諸仙初得仙者。關送此國。修行七十萬日。然後得至諸天。或玉京蓬萊崑閩姑射。然方得仙官職位。主籙主符主印主衣。飛行自在。工人曰。

白泉眼の沐浴



これ下界の上仙國

既<sub>レ</sub>是仙國。何在吾國之下界。門人曰。吾此國是下界之上仙國也。汝國之上。還有仙國。如吾國亦曰梯仙國。更無所異。言畢。謂工人曰。卿可歸矣。遂却上山。聿尋來路。又令飲白泉數掬。欲至山頂。求來穴。門人曰。汝來此雖傾刻。已人間數十年矣。却出舊穴。應不可矣。待吾奏請通天關鑰匙。送卿歸。工人拜謝。須臾門人携金印及玉簡。又引工人別路而上。至一大門。勢偉樓閣。門有數人。俯伏而候。門人視金印。讀玉簡。副然開門。門人引工人上。纔入門。風雲擁而去。因無所覩。唯聞門人云。好去爲吾致意於赤城眞伯。須臾雲開。已在房州北三十里孤星山頂。洞中出後。而詢陰隱客家。時人云。已三四世矣。開井之由皆不能知。工人自尋其處。惟見一巨坑。乃崩井之所爲也。時貞元七年。工人尋覓家人了不知處。自後不樂人間。遂不食五穀。信足而行。數年後。有人於劔閣雞冠山側近逢之。後莫知所在。(博異記陰隱客)

脱け穴は房州の北卅里に達す

死生之際。一生學問大關頭也。然有名爲巨儒而處死反不及常人者。如林兆

死生の際は一生學問の大關頭なり

恩。會通三教。自謂海內一人。而臨死乃病狂喪心。便溺俱下。吾郡一搢紳王鑛者。平日無所聞。年踰八十。自知死期。戒訓子孫。無作佛事。仍賦長詩一篇。既而曰。明日未能便去。後日望日也。吾當以十六日去。至期沐浴。衣冠談笑而逝。此豈有宿根耶。抑平日不言躬行。人有不及知耶。林之虛名。高王十倍。而死生之間。迥別。乃爾。殊可恠也。(五雜俎)

火中往生の化けの皮

史傳所載。僧自焚者有三。其一唐李抱眞。爲潞州節度使。兵荒之後。財用窘竭。素與一僧交善。乃謂之曰。事急矣。欲借師之道以濟軍國。可乎。僧曰。性命可捐。無所惜。曰師但投牒言欲自焚。吾爲地道。與州宅通。火發之頃。卽潛身而入。彼此俱無所損。因引僧至地道。往來無阻。僧信之。遂積薪高坐。說法辭世。李親率將校膜拜舍施於。是州人響應雲集。貨財山積。越期舉火。李已命人。潛塞地道。頃刻之間。僧薪俱灰。收其施財。以充公帑。別求如舍利者數十枚。建塔葬之。



自焚の僧未  
練の涙に暮

贖罪官の惡  
戲僧を焚く

道家の術は  
黄老の宗に  
非ず

其一。宋某人爲某官。有僧投牒欲自焚。判許之。至期親往驗視。見僧兩眼凝淚不動。問之不答。乃令人梯取之。授以紙筆。乃自言某處遊僧至此寺。衆欺其愚弱。誑言惑衆。厚得錢帛。至期藥而縛之耳。遂按誅諸僧。毀其寺。又其一。元時達魯花赤爲政。不通漢語。動輒詢譯者。江南有僧。田爲豪家。所侵投牒訟之。豪厚賂譯。既入。達魯花赤問譯。僧訟何事。譯曰。僧言天旱欲自焚以求雨耳。達魯花赤大稱讚。命持牒上。譯業別爲一牒。卽易之以進覽畢。判可。僧不知也。出門則豪已積薪通衢數十人。昇僧昇火中焚之。然則從來火化之妄惑。往往如是矣。(同上)

道家之教。若徒以功行積滿。白日昇天。尙可以誘人爲善。卽非柱下黃左宗旨。吾不之責也。彼熊經鳥伸。鍊形住世。已自是貪生業障無益於時。而况於黃白龍虎之術。房中采戰之方。貪利無厭。縱欲敗度。以之求長生。何異適燕而南向鄧哉。道家之旨。清淨無爲。不見可欲。使心不亂。不貴難得之貨。使民不爲

盜。况神仙乘雲御氣。下視塵寰。縱有大藥點化山河大地。盡成黃金。亦復何益於身心性命。而且必無之事也。然世間固有一種癡人。妄想甘受邪術所欺。而崇奉惑溺。至破家亡身而不顧者。此又不如佞佛持素。差覺安靜耳。(同上)

八洞の仙人  
は皆偽物

世傳上中下八洞皆有仙人。故俗動稱八仙。云如所謂鍾離鐵拐韓湘子張果老之屬。皆列仙傳採拾而強合之耳。張果乃明皇時術士。與羅公遠葉法善同在朝。非仙也。獨呂洞賓者。史傳所載靈異之蹟。昭彰在人耳目。想不可謂之全誣。今世所傳。純陽詩字甚多。如朝遊北海暮蒼梧。及石池清水是吾心者。好事者哀爲之集。但純陽唐人既舉進士。又列仙籍。而其詩乃類宋人口吻。豈亦後人傳會所成耶。不然既遺世高舉。而又屢降人間。若戀戀不忍舍者。何也。退之云。我自屈曲住世間。安能從汝求神仙。此視純陽去而復來者。過之遠矣。(同上)

宋瑞州高安縣鄭氏女定二孃者。臨嫁汲井。忽有彩雲掖之升天。州縣以聞。立



仙姑の正體  
は私通女

祠建廟。祈禱輒應。既而廉之。則因與人通而孕。父母醜之。蜜售於傍邑。而托詞惑衆耳。無何新建有闕氏者。僱一婢訊之。卽仙姑也。昌黎謝自然華山詩意。亦可見不獨此也。漢末張道陵。避癘丘社。得呪鬼之術。遂以符術。使鬼療病。後爲蟒蛇所吞。子衡奔往覓屍不得。乃生糜鴿。足置石崖頂。託以白日昇天。至今歷代崇奉。稱爲天師。良可笑也。(同上)

五斗米道の  
流禍

張道陵。初以妖術惑衆。治病者令出五斗米。故世號米賊。陵死。子衡傳其道。衡死。魯復行之。魯母有姿色。出入益州牧劉焉之家。以魯爲司馬。後劉璋立。殺魯母及家室。魯遂據漢中以叛。後爲曹操所攻。降魏爲鎮南將軍。張之本末不過如此。自晉及唐。尙未有聞。至五代。遂稱天師。歷宋元。未有非之者。據廣信之龍虎山。金碧殿宇。偃然爲世業矣。我太祖皇帝曰。至尊者天。豈有師也。削之。止稱真人。然以二品秩傳流後裔。亦幸之甚矣。真人每入觀。沿途民爲鬼魅所惱者。悉往投牒。所至成市。聞其符籙。亦有驗者。故愚民信奉之也。萬曆間。京

師大旱。適真人入朝。上命留之禱雨。終不効。乃遣之。則其伎倆亦與尋常黃冠一間耳。(同上)

閩中三教の  
術

今天下有一種吃素事魔及白蓮教等人。皆五斗米賊之遺法也。處處有之。惑衆不已。遂成禍亂。如宋方臘元紅巾等賊。皆起於此。近時如唐賽兒王臣許道師。皆其遺孽。而吾閩中又有三教之術。蓋起於莆中林兆恩者。以良背之法。教人療病。因稍有驗。其徒從者雲集。轉相傳授。而吾郡人信之者甚衆。兆恩死後。所在設講堂香火。朔望聚會。其後又加以符籙醮章祛邪捉鬼。蓋亦黃巾白蓮之屬矣。兆恩本名家子。其人重意氣。能文章。博極羣書。倭奴陷莆後。骸骨如麻。兆恩捐千金。葬無主屍。以萬計。名遂大譟。其後著三教會編。授徒講學。頗流入邪說。而不自知。既老病得心疾。水火不顧。顛狂逾年乃死。此豈真有道術者。而閩人惑之。至死不悟也。今其徒布滿郡城。其中賢者。尙與士君子無別。一二頑鈍不肖者。藉治病以行其私。奸盜詐僞無所不有。其與邪巫女覩。又何別哉。余十三四

兆恩の狂死



時見三教書。心甚不然。著論以闢之。今亦不復記憶。及既長。入閩觀其行事。益自負前言之不妄也。(同上)

少年少女の尿を藥劑とする

醫家有取紅鉛之法。擇十三四歲童女美麗端正者。一切病患殘疾聲雄髮粗及實女無經者俱不用。謹護起居。候其天癸將至以羅帛盛之。或以金銀爲器入磁盆內。澄如珠砂色。用烏梅水及井水河水攪澄七度。曬乾合乳粉辰砂乳香秋石等藥爲末。或用雞子抱或用火煉。名紅鉛丸。專治五勞七傷虛憊羸弱諸症。又有煉秋石法。用童男女小便。熬煉如雪。當鹽服之。能滋腎降火。消痰明目。然亦勞矣。人受天地之生。其本來精氣自足。供一身之用。少壯之時。酒色喪耗。宴安賦毒厚味戕其內。陰陽侵其外。空餘皮骨。不能自持。而乃倚賴於腥臊穢濁之物。以爲奪命返魂之至寶。亦已愚矣。况服此藥者。又不爲延年祛病之計。而藉爲肆志縱欲之地。往往利未得。而害隨之。不可勝數也。滌陽有詵道人。專市紅鉛丸。廬州龔太守廷賓。時多內寵。聞之甚喜。以百金購十丸。一月間盡服

紅鉛丸を飲み九竅出血

之。無何九竅流血而死。可不戒哉。(同上)

丹を飲むの危険

金石之丹。皆有大毒。即鐘乳硃砂。服久皆能殺人。蓋其燥烈之性。爲火所逼伏而不得發。一入腸胃。如石灰投火。烟焰立熾。此必然之理也。唐時諸帝。如憲文敬懿之屬。皆爲服丹所誤。宋時張聖民林彥振等皆至發瘍潰。腦不可救藥。近代張江陵末年服丹。死時膚體燥裂。如炙魚然。夫鍊丹以求長生也。今乃不能延齡。而反以促壽。人何苦所爲。愚而恬不知戒哉。蓋皆富貴之人。志願已極。惟有長生一途。欲之而不可得。故奸人邪術。得以投其所好。寧死而不悔耳。亦可哀也。(同上)

強精劑の怖るべき反應

金石無論。即兔絲杜仲一切壯陽之劑。久服皆能成毒發疽。老學庵所載可見。至於紫河車。人皆以爲至寶。亦不宜常服。此藥。醫家謂之混元髓。取男胎首生者爲佳。丹書云。天地之先。陰陽之祖。乾坤之橐籥。鉛汞之匡廓。胚胎將兆九九數



足。我則乘而載之。故謂之河車。紫其色也。此藥雖無毒。而性亦大熱。虛勞者服之。恐長其火。壯盛者服之。徒增其燥。夫天地生人。清者為氣。濁者為形。父精母血。凝合而成。氣足而生。至寶具矣。胞衣者。乃臭腐之胚胎。血肉之渣滓。故一旦瞥然脫胎下世。猶神仙之委蛻也。人生已棄之物。寧復藉此而補助哉。况聞胞衣為人所烹者。子多不育。故產蓐之家。防之如仇。惟有無賴乳媪。貪人財賄。乘間竊之。以希厚直耳。夫忍於天傷人子。以自裨益。仁者且不為也。而况未必其有功。而徒以靈明高之潔。之府為藏污納穢之地也。(同上)

胞衣を烹る  
奸媪

全然効無き  
太乙の餘糧

泰山有太乙餘糧。視之石也。石上有甲。甲中有白。白中有黃。相傳太乙者禹之師也。嘗服此而棄其餘。故名。又有石中黃。即餘糧之未凝者。水溶若生雞子焉。又會稽有石。亦重疊包裹。而中有粉如麵者。名禹餘糧。皆治欬逆。破癥瘕。恐是一物。因其黃白二色。所產異地。而分別之耳。其益州所產空青。則中但有清水。而無重疊也。語曰。醫家有空青。天下無盲人。余友陳幼孺醫疾。有人遺之者。延

醫治之。竟不効也。(同上)

黃冠之教。始於漢張陵。故皆有妻孥。雖居宮觀。而嫁娶生子。與俗人不異。奉其教而誦經。則曰道士。不奉其教。不誦經。惟假其冠服。則曰寄褐。皆遊惰無所業者。亦有凶歲。無所給食。假寄褐之名。挈家以入者。大抵主首之親故也。太祖皇帝深疾之。開寶五年閏二月戊午。詔曰。末俗竊服冠裳。號為寄褐。雜居宮觀者。一切禁斷。道士不得畜養妻孥。已有家者。遣出外居。止今後不許私度。須本師知觀。同詣長吏陳牒。給公憑。違者捕繫抵罪。自是宮觀不許停著婦女。亦無寄食者矣。而黃冠之兄弟。父子孫姪。猶依憑以居。不肯去也。名曰親屬。大中祥符二年三月庚子。真宗皇帝詔。道士不得以親屬住宮觀。犯者嚴懲之。自後始與僧同其禁約矣。(燕翼貽謀錄)

道士妻帯の  
禁令

劉晏判官李邈。莊在高陵。莊客懸缺租課。積五六年。邈因官罷歸莊。方欲勘責。



墓穴内の構造、自動防禦機關

見倉庫盈羨。輸尙未畢。邈怪問。悉曰某作端公莊客二三年矣。久爲盜。近開一古冢。冢西去庄十里。極高大。入松林二百步方至墓。墓側有碑。斷倒草中。字磨滅不可讀。初旁掘數十丈。遇一石門。固以鐵汁。累日洋糞。沃之方開。開時箭出如雨。射殺數人。衆懼欲出。某審無他。必機關耳。乃令投石其中。每投箭輒出。投十餘石。箭不復發。因列炬而入。至開第二重門。有木人數十。張目運劍。又傷數人。衆以棒擊之。兵仗悉落。四壁各畫兵衛之像。南壁有大漆棺。懸以鐵索。其下金玉珠璣堆集。衆懼未卽掠之。棺兩角忽颯颯風起。有沙迸撲人面。須臾風甚。沙出如注。遂投至膝。衆皆恐走。比出門已塞矣。一人復後爲沙埋死。乃同酬地謝之。誓不發冢。(酉陽雜俎)

又侯白旌異記曰。一作言。盜發白冢茅棺內大吼如雷。野雉悉雊穿。內火起。飛焰赫然。盜被燒死。得非伏火乎。(同上)

近日有全真教一門。從中又分南北二宗。青巖叢錄云。昉於金。南宗先命。北宗

全真教の系

儒釋を借るの陋

先性。筆叢則云始於宋南渡。皆本之呂巖。巖又傳爲二宗。而全真之名。立自王重陽。至於符籙科教。具有其書。正一之家。實掌其業。而今正一。又有天師宗。分掌南北教事。江南北虎閣阜茅山三宗符籙。又各不同。大抵道家之說。雜而多端。清淨一說也。煉養一說也。服食。又一說也。符籙。又一說也。經典科教。又一說也。自清淨兼煉養。趨而服食。而符籙。最下則經典科教。蓋黃冠以此逐食。常欲與釋子抗衡。而其說較釋氏。不能三之一。爲世患蠹。未爲甚鉅。獨服食符籙二家。其說本邪僻謬悠。而惑之者。罹禍不淺。蓋馬端臨之說如此。最爲精當。佛書。竊取道家之精。佛家之粗。今全真一教。大約是服食符籙。又在二宗之下。余所見醒神翁者。其一也。若國初鐵冠冷謙三斗之類。乃真仙。應大聖人出世。又不可例論。

(湧幢小品——全真教)

科醮說の表類

其法盛於元魏寇謙之。後唐則明崇儼。葉法善。翟乾祐。五代則譚紫霄。宋則薩守堅。王文卿等。而林靈素最顯。科醮之說。始自杜光庭。宋世尤重其教。朝廷以至



老子の本旨に勃る

閭巷所在盛行。南渡。白玉蟾輩。亦嘗爲人奏章。今二業皆無顯著者。獨龍虎山張真人尙世襲。至我憲宗時。有李致省。鄧常恩。流爲房中之術。世廟時。邵元節。陶典真。突起壓張真人之上。大抵符籙之說。自佛教業緣因果中流出。又竊佛經之緒餘。作諸經懺。動人耳目。取利。原非老子清淨本指。乃寇謙之一出。魏大武緣之。盡毀寺刹。誅諸沙門。殆盡。宋徽宗於林靈素亦如之。至改僧爲德士。世宗時。焚佛骨。至萬二千餘斤。佛之神通。能資方士竊弄。而不能保其居與骨。若諸弟子輩。此亦業報使然耶。(同上——符籙)

服食章確に至り老子の道亡ぶ

神仙家。必引儒釋爲重。胡元瑞筆叢中。言之頗詳。并老子化身名號。皆錄於後。乃儒釋未有引神仙者。此其分量可見。蓋後世神仙之說。雖原本道家。實與道家異。至於服食章醮。而老子之道亡也久矣。夫陰陽五行變化無窮。其初氣運龐厚。團作一塊。於人爲三皇。爲五帝三王。與諸名世大臣。於教爲孔子。爲釋迦。爲老聃。衰周以後。氣運漸薄。各各迸散。千奇萬態。莫知底極。天地鬼神不得自主。

泉亭山の老君像

總難收拾。且爲所使矣。孔子爲水精子。繼周爲素王。西陽雜俎。一曰元官上仙。一曰大極上真公。治九疑山。一曰廣桑山真君。太平廣記。一曰儒童菩薩。下生世間。地經。一曰淨光童子。化身顏子。爲月明儒童。俱清淨法行經。一曰明時晨侍郎。後爲三天司直。已見卮言。後夏瓊亦爲明晨侍郎。見仙鑑。一曰與卜商。皆修文郎。見太平廣記。長亦爲此官。後樂子見仙鑑。仲由在唐爲韓滉。太平廣記。施存在漢爲壺公。施存。亦仲尼門人。事見真誥。及卮言。然術覽兩引。壺公姓謝名元。未知孰是。(同上——引儒釋)

泉亭山。爲武林左托。南濱錢江。黃鶴峯最高峯。下有石磯。頗幽邃。一老人周姓者。常憩其中。見有老君石像。高止尺許。瑩淨。隱隱有生氣。捧歸寘堂中。夜發光彩。因募築精舍。爲龕貯之。塑八仙像。鶴鹿各二於傍。晨起禮拜不替。一日。有絲竹聲。非人間所有。起窺窻間。見石像有笑容。仙像隱若搖動。鶴鹿亦如之。良久乃止。惟窻入。香氣充滿。餘像皆如故。而老君獨起齒。若改削成者。甚駭。且甚以爲幸。日午一道士揮扇入賀曰。知君大有瑞應。然此像不宜久留。當以見還。亟捧而走。老人奮起爭之。搏空無所。見惟一道白氣冲天。遂棄家雲遊不知



左肩上の佳兆

所終。今其子孫尚居山下。俱樵夫。問之。曰此遠祖相傳已久。謂其年礪邊松花盛開羣鶴徊翔。花撲起鶴翅皆黃。故以名峯。峯高可三千丈。挾羣峰而東。若馳與兩天目相應。圓整秀拔。獨峙錢江上。江海連接。所謂海門一點巽蜂起者。可咫尺按也。乙卯。余登其顛。忽一鶴飛過。墮羽。適當余左肩上。知非佳兆。凡二三年。間患難疾病。無所不經。無所不劇。因泛海上。普陀山中。故稀禽鳥。復有飛鶴墮羽。當余右肩。喟然嘆曰。此所謂鍛羽且再。兆可知矣。歸來復大病。口占曰。骨格原來定。精神漸已非。橫空雙鶴度。海上有魚磯。息心待盡。更覺快然自得。而舍東有農庄。因棄家棲其中。魚鳥日夕相親。即其地改葬先祖月溪府君。每晨起東望。紅光盪漾。庶幾二鶴來歸。又口占曰。渡海鶴飛還。愴然只閉關。幻軀元不着。去住總間間。雖病不服藥。聽之而已。(同上)老君像

高郵湖中の老蚌

高郵壁社湖大三十里。嘗有物夜吐光。能照行人。朗若白晝。忽來一番僧。儼居湖干。鎮日緣湖審視。如是者有年。一日折柬徧招鄰衆。肆筵設席。酒穀備極豐。

菴僧。老蚌と闘ふ

腆。衆問何求。曰求諸君翌晨助老僧一臂。衆莫測所以。姑漫應曰諾。如期畢至。僧出鉦鼓數百具。授衆。使分立湖四隅。求爲搥鼓敲鉦。以助聲威。毋少停止。自冠毘盧。着袈裟。仗劍躍入湖中。少選狂風暴作。湖水奔騰澎湃。勢如千軍萬馬。衆心驚魄。遵其所囑。奮勇搥敲。自晨至於日中。僧始踏浪而出。搥手喻衆。停止鉦鼓。登岸喘汗良久。滿袈裟血漬淋漓。腥氣刺衆。衆問何爲。曰。此中有老蚌。自開關以來。胎養寶珠。光奪日月。老僧欲仗法力攘劫之。奈彼道行甚高。幾爲所吞。今右殼被寶劍斫傷。遁往東海。竟無法可制。再待千年。留爲後圖。可也。稽首別衆而去。(里乘)

嵩山の老蜈蚣

嵩山之陽。春日啓蟄之後。民常夜見少室之顛。紅光兩道。一長六七尺。一長四五尺。蜿蜒天矯。若火龍然。雞鳴遂隱。經秋即不得見。莫測其故。初山下農家畜一雄鷄。氣象赳赳。重可十斤。所種之卵。無不嚴者。主人寶之。呼曰老雄。十餘年不肯殺。歲又值鷄之時。忽以數十卵。僅歸一雄。其餘盡鰥。主人懊怨以爲不祥。一

菴買鷄を五百銀に買ふ



日有番買來。注視老雄與雞。問主人肯市否。主人正慮老雄年久無用。姑漫應曰。客若肯出重價。那得不市。客問此兩雞索價幾何。曰五百足矣。客喜曰。諾。主人初固索五百錢。見客遽喜諾。戲反齒給之曰。我所言固五百銀。非錢也。客沈思久之。曰果爾。五百銀亦所不吝。毋再翻悔。主人大喜過望。答曰。君如數將銀來。誓不翻悔。客喜。翌日果攜銀五百來付主人。主人乃籠兩雞付之。笑拉客袂問曰。我初固戲君耳。不謂果肯如數。敢問需此何爲。客笑曰。君既見問。不敢不告。君不見少室之巔。紅光兩道乎。曰然。曰此蜈蚣精也。一父一子。再百年後。少者長成。一方禽獸。蠶食無遺。且不免災及小兒。實爲大患。雷且難治。今少者尙稚。老若勢孤。尙不敢公然肆虐。惟此兩雞足以制之。老雄固無足慮。惟新雞初敵。當飼以珍物。庶可速豐其毛羽。壯其筋力。矧聞數十卵僅得此雞。可知精氣獨鍾。無怪其餘盡廢也。計明年此時。新雞當亦可爲老雄之助。制兩妖不難矣。曰此兩雞與他雞何異。曰凡雞皆隄皮上掩。此則相反。名曰怒睛。是鳳種也。別去。歲星一周。客果攜兩雞來訪主人。其雞已長成。居然與老雄相等。客

老雄と大蜈蚣の決闘

卽下榻主人之家。他日又見。少室紅光兩道。客喜呼主人曰。妖物又出矣。越日薄暮。客攜雞獨往。主人欲同往觀之。客止之曰。君不能勝妖氣。中毒可慮。客去。主人留心遙察。二更後。見少室之巔。紅光復灼。猶之掣電兩股。以閃爍。或東或西。或南或朔。或抑或揚。或分或合。或屈詘如環。或直伸如索。或迴旋如鷹盤。或奮激如魚躍。或少卷而驟舒。或將前而頓却。燿燿焉。燿燿焉。忽詫五尺孛芒。疾馳斜掠。半明半滅。徒萬丈而一落。主人色賊心喜。知小妖已告殲。尙有紅光一道。忽高之。忽低之。忽卽之。忽離之。氣漸披靡。知其亦無能爲。果不一炊黍時。宛然敗葉漾空。慘爲狂飈之所摧。飄蕩蕭颯。站然而下。墜荒畦。紅光悉絕。東方欲白。主人知兩妖並除。姑飯茶以待客。俄焉見客左手籠雞。右手以樹條貫拽兩妖而至。主人迎而賀曰。知大功告成。喜爲君賀。客嘆曰。兩妖雖除。惜兩雞皆受重傷。奈何。主人視小雞。竟體毛羽脫落殆盡。僅存一息。老雄亦毛羽徒離。精神沮喪。又視其蜈蚣。大者長約六尺。左鉗已脫。足尙有一二蠕蠕動者。小者長五尺許。雙鉗並去。足已夷其大半。僵如枯木矣。主人問此尙有用否。曰紅光外燭。



珠當不少。卽兩軀壳。以製刀劍鞘。亦值千金也。乃以兩雞授主人。屬善視之。且謂出力過甚。小雞不過十日。老雞不過半年。皆當羽化。有功於人。尙其瘞之。其身受重毒。切不可食。慎之慎之。越日客辭。主人又以二百金相謝。以木匣盛。二妖負之而去。後兩雞果如期先後俱斃。主人謹遵客所囑。並瘞之。(里乘)

產鬼の奇術

鄉民畢酉。素有膽識。嘗以妻有娠將產。月夜趁墟回家。道逢一女子。蹣跚獨行。同路數里。略不聞其鼻息。心竊異之。試叩其氏族。當此午夜。獨行何之。女子答曰。妾非人。乃產鬼也。前村畢家婦。分娩在卽。特往討替去。酉大驚。默籌所以制之。佯笑答曰。此大好事。汝得替投生好人。家可賀也。曰。此非所望。然得脫離鬼趣。卽爲萬幸。因問酉姓名。乃詭對之。談論甚洽。酉又問汝爲鬼幾何年矣。曰。於今十有三年矣。曰。求替何遲遲也。曰。陰曹必計平生善惡。以判遲速。孽滿方准求替。故遲遲此至於今也。曰。求替亦有術乎。曰。有。凡產鬼喉間各有紅絲一縷。名曰血餌。以此繩入產婦腹中。繫其嬰胞。不使遽下。又暗中頻頻抽掣之。令其

產鬼の饒舌

產婦の危難  
忽ちに救は  
る

痛徹心髓。雖健婦。只三五抽掣。則命畢矣。酉佯笑曰。此術誠巧。未審有法制之否。鬼但笑而不言。酉又固詰之。則曰。制之亦自有法。但君切不可告人。酉指天申誓。決不泄語。鬼稍謂曰。產鬼最畏雨繖。以一繖置戶後。卽不敢入房矣。酉曰。然則更無別術乎。曰。君必勿洩。乃敢畢其詞。酉曰。固申誓矣。倘泄語。卽與汝等。鬼喜其誠。曰。如不能入房。則伏屋上。以血餌繩入產婦口中。亦可。倘於床頂再張一繖。使血餌不能下繩。則鬼術窮矣。以君長者。故敢質告。倘泄語。則我無生望矣。願君諒之。酉曰。諾。既至家。妻正以難產。勢甚危殆。酉如鬼言。急以一繖置戶後。又張一繖於牀頂。不踰時。果呱呱墮地。而妻得無患。少選。聞空中呼酉名而嘗之。曰。促狹鬼。我不幸爲汝所給。又要遲此一次。汝如再告他人。致我永無生望。則天良喪盡矣。漢息恨恨而去。酉聞而匿笑。爲妻細述之。妻甚惡此苦。囑徧告人。凡有娠之家。各如法預防之。果皆無恙。(里乘)

吳介臣侍御台壽。言湖州閔小良司馬。素好學道。得真仙李泥丸秘傳。後以尸解。



唯液で煉つ  
功た泥丸の妙

附錄

五〇

上昇李泥丸者。初乞食於市。衣須捷而身垢穢。人不能邇。會有巨紳士。患消渴疾。百醫罔效。其妻禱於神。遇李於廟中。笑謂曰。娘子欲活郎君耶。禱神無益。何不求我。從者陋其狀。訶叱之。妻遽止之。曰。否否。我聞風塵中。偶有真仙遊戲。或有緣幸遇。不可知。爾曹勿以貌失之也。遽前檢衽。叩李求方。李笑曰。娘子既誠心來求。亦易易耳。乃掬地上泥。自吐沫搓爲丸授之。曰。歸以白湯進。病者吞之。當立愈。妻謝而受之。從者吃吃匿笑。妻歸。思病者歷試諸方皆不效。姑以此投之。何害。遂進白湯。趣吞其丸。巨紳子果一汗而瘳。自此人皆以爲遇仙。遠近就李求方者。曰。李相接。俱以沫團泥丸予之。無不立效。僉稱爲李泥丸云。司馬聞之。拜求爲師。李相司馬。謂有仙骨。可以入道。許之。司馬嘗具湯沐奉新衣。請宅易之。笑却不受。每行市上。喜與小兒戲。群兒亦樂從之遊。皆呼曰李神仙。戲拾敗葉。呵之卽成錢。分給群兒。使市果餌。錢上字幕分明。歷久不變。何其神也。司馬嘗叩拔宅飛昇之說。一日卓午。李攜司馬立日中。取自着破襪笠。置司馬頭上。又取司馬角巾。自着之。屬司馬視其影。李則但見帽影。而不

木の葉が錢  
に化す

見人影。已則但見人影。而不見帽影。李謂之曰。所謂拔宅者。祇就本身所御之物而言。身果能仙。平日卽身所御之物。皆隨之而仙。非必宅果可拔也。司馬恍然。道以日進。或曰。李泥丸卽李八百。

里乘子曰。予初識吳氏昆仲於方子箴都轉揚州官署。與次垣論古今書家。意見不合。次垣攘臂相爭。自折其齒。舉座皆笑。逾時意氣俱平。談笑自若。固各無蒂蘗也。介臣喜談道。一日都轉招飲。介臣席間談李泥丸事。並述司馬尸解後。以道傳袁太太。某宅素凶。主人請袁治之。袁以繩連繫七鬼。宅乃轉凶爲吉。詞鋒雪々四座口爲之噤。會道州何子貞先生在座。素不喜人談怪。枯坐欲睡。介臣方刺刺不休。亦不以爲意也。乃曾幾何時。不兼旬。而昆仲竟相繼下世。追憶朋友聚散存歿之感。爲之愀然。(同上)

先大夫守湖州時。小良司馬居金蓋山下。先妣楊太夫人有疾。先大夫攜予宿金蓋。禮懺求丹藥療之。果瘳。司馬遇醮壇則易交裳。平時酬酢往來。仍著冠服。嘗至署中。先大夫觴之。予亦侍坐。司馬茹葷飲酒。談道娓娓不倦。惜予方幼

附錄

五一



稚不能解其旨趣也。(方子箴識)

拾遺記

周

周武王東伐紂。夜濟河。時雲明如晝。八百之族皆齊而歌。有大蜂。狀如丹鳥。飛集王舟。因以鳥畫其旗。翌日而梟紂。名其船曰蜂舟。魯哀公二年。鄭人擊趙簡子。得其蜂旗。即其類也。事出太公六韜武王使畫其像於幡旗。以為吉兆。今人幡信皆為鳥畫。則遺象也。

大蜂の嘉瑞

泥離國の形狀

成王即政三年。有泥離之國來朝。其人稱自發其國。當從雲裏。而行聞雷霆之聲在下。或入潛穴。又聞波瀾之聲在上。視日月以知方國所向。計寒暑以知年月。考國之正朔。則序歷與中國相符。王接以外賓禮也。

附錄



鳳凰の出現

四年。旃塗國獻鳳雛。載以瑤華之車。飾以五色之玉。駕以赤象。至於京師。育於靈禽之苑。飲以瓊漿。飴以雲實。二物皆出上元仙方。鳳初至之時。毛色文彩彪發。及成王封泰山禪社首之後。文彩炳耀中國。飛走之類。不復喧鳴。咸服神禽之遠至也。及成王崩。冲飛去。而孔子相魯之時。有神鳳遊集。至哀公之末。不復來翔。故云。鳳鳥不至。可為悲矣。

口中糸を吐き文錦を織る

五年。有因祇之國。去王都九萬里。獻女工一人。體貌輕潔。被織羅雜繡之衣。長袖修裾。風至則結其衿帶。恐飄飄不能自止也。其人善織。以五色絲。內於口中。手引而結。則成文錦。其國人來獻。有雲崑錦。文似雲從山岳中出。有列堞錦。文似雲霞覆城雉樓堞。雜珠錦。文似貫珠珮也。有篆文錦。文似大篆之文也。有列明錦。文似列燈燭也。幅皆廣三尺。其國丈夫勤於耕稼。一日鋤十頃之地。又貢嘉禾。一莖盈車。故時俗四言詩曰。力勤十頃。能致嘉穎。

一莖盈車の嘉禾

絕域燃邱國

六年。燃邱之國。獻比翼鳥雌雄各一。以玉為樊。其國使者。皆拳頭尖鼻。衣雲霞之布。如今朝霞也。經歷百有餘國。方至京師。其中路山川不可記。越鐵峴。泛沸海。蚺洲。蜂岑。鐵峴峭礪。車輪剛金為輞。比至京師。輪皆銚銳幾盡。又沸海洶湧如煎魚髓。皮骨堅強如石。可以為鎧。泛沸海之時。以銅薄舟底。蛟龍不能近也。又經蚺洲。則以豹皮為屋。於屋內推車。又經蜂岑。燃胡蘇之木。此木煙能殺百虫。經途十五餘年。乃至洛邑。成王封泰山禪社首。使發其國之時。並童稚。至京師。髮皆白。及還至燃邱。容貌還復少壯。比翼鳥多力狀如鵠。銜南海之丹泥。巢崑岑之玄木。遇聖則來集。以表周公輔聖之祥異也。

發足時の童稚着京時の白髮翁

口中涌出の小人百戲の樂を奏す

七年。南陲之南。有扶婁之國。其人善能機巧變化。異形改服。大則興雲起霧。小則入於纖毫之中。綴金玉毛羽為衣裳。吐雲噴火。鼓腹則如雷霆之聲。或化為羣犀象。師子龍蛇火鳥之狀。或變為虎兕。口中生人。備百戲之樂。宛轉屈曲。於



指掌間。人形或長數分。或復數寸。神怪歛忽。銜麗於時。樂府皆傳此伎。至末代。猶學焉。得龜亡精。代代不絕。故俗謂之婆猴伎。則扶婁之音。訛替至今。

周昭王に換心術を試む

足萬里の外に飛び天に後れて死す

青鳳丹鶴の扇

昭王即位二十年。王坐祇明之室。晝而假寐。忽夢白雲蔚蔚而起。有人衣服並皆毛羽。因名羽人。夢中與語。問以上仙之術。羽人曰。大王精智未開。欲求長生久視。不可得也。王跪而請。受絕欲之教。羽人乃以指畫王心。應手即裂。王乃驚寤。而血濕衿席。因患心疾。即卻膳撤樂。移於旬日。忽見所夢者復來。語王曰。先欲易王之心。乃出方寸綠囊。中有續脉明丸。補血精散。以手摩王之臆。俄而即愈。王即請此藥。貯以玉缶。緘以金繩。王以塗足。則飛天地萬里之外。如遊咫尺之內。有得服之。後天而死。

二十四年。塗修國獻青鳳丹鶴。各一雌一雄。孟夏之時。鳳鶴皆脫易毛羽。聚鵠翅。以為扇。緝鳳羽以飾車蓋也。扇一名遊飄。二名條翻。三名虧光。四名仄影。時

東鷗獻二女。一名延娟。二名延娛。使二人更搖此扇。侍於王側。輕風四散。冷然自涼。此二人辯口麗辭。巧善歌笑。步塵上無跡。行日中無影。及昭王淪於漢水。二女與王乘舟。夾擁王身。同溺於水。故江漢之人。到今思之。立祀於江湄。數十年間。人於江漢之上。猶見王與二女乘舟戲於水際。至暮春上巳之日。楔集祠間。或以時鮮甘味。採蘭杜包裹。以沈水中。或結五色紗囊盛食。或用金鐵之器。並沈水中。以驚蛟龍水虫。使畏之不侵。此食也。其水傍號曰招祇之祠。綴青鳳之毛為二裘。一名煩質。二名喧肌。服之可以卻寒。至厲王流於彘。彘人得而奇之。分裂此裘。遍於彘土。罪人大辟者。抽裘一毫。以贖其死。則價值萬金。

周 穆 王

穆王即位三十二年。巡行天下。馭黃金碧玉之車。傍氣乘風。起朝陽之岳。自明及晦。窮富縣之表。有書史十人。記其所行之地。又副以瑤華之輪十乘。隨王之。後以載其書也。王馭八龍之駿。一名絕地。足不踐土。二名翻羽。行越飛禽。三

周穆王の八駿



名奔霄。夜行萬里。四名超影。逐日而行。五名踰輝。毛色炳耀。六名超光。一形十影。七名騰霧。乘雲而奔。八名挾翼。身有肉翅。遞而駕焉。按轡徐行。以匝天地之域。王神智遠謀。使迹轂遍於四海。故絕異之物。不期而自服焉。

三十六年。王東巡大騎之谷。指春宵宮。集諸方士仙術之要。而鸚鵡龍蛇之類。奇種憑空而出。時已將夜。王設常生之燈。以自照。一名恒輝。又列瑤膏之燭。遍於宮內。又有鳳腦之燈。又有冰荷者。出冰壑之中。取此花以覆燈七八尺。不欲使光明遠也。西王母乘翠鳳之輦而來。前導以文虎文豹。後列雕麟紫麀。曳丹玉之履。敷碧蒲之席。黃莞之薦。共玉帳高會。薦清澄琬琰之膏。以為酒。又進洞淵紅饌。岷州甜雪。峴流素蓮。陰岐黑棗。萬歲冰桃。千常碧藕。青花白橘。素蓮者一房百子。凌冬而茂。黑棗者。其樹百尋。實長二尺。核細而柔。百年一熟。

萬歲一實の桃

扶桑東五萬里。有磅塘山。上有桃樹百圍。其花青黑。萬歲一實。爵水在磅塘山東。

玉帳裡の穆王と西王母

象竹の管大  
林の靜瑟

其水小流在大陂之下。所謂沈流。亦名重泉。生碧藕。長千常。七尺為常也。條陽山出神蓬如蒿。長十丈。周初國人獻之。周以為宮柱。所謂蒿宮也。中有白橘。花色翠而實白大如瓜。香聞數里。奏環天之和樂。列以重霄之寶器。器則有岑華鏤管。佛澤雕鐘。員山靜瑟。浮瀛羽磬。撫節按歌。萬靈皆聚。環天者。鈞天也。和廣也。出穆天子傳岑華。山名也。在西海。上有象竹。截為管吹之。為羣鳳之鳴。佛澤出精銅。可為鐘鐸。員山。其形員也。有大林。雖疾風震地。而林木不動。以其木為琴瑟。故曰靜瑟。浮瀛。即瀛州也。上有青石。可為磬。磬者長一丈。輕若鴻毛。因輕而鳴。西王母與穆王歡歌既畢。乃命駕昇雲而去。

魯僖公

僖公十四年。晉文公焚林以求介之推。有白鷄。遶煙而噪。或集之推之側。火不能焚。晉人嘉之。起一高臺。名曰思煙臺。種仁壽木。木似柏而枝長柔軟。其花堪食。故呂氏春秋云。木之美者。有仁壽之華焉。即此是也。或云。戒所焚之山數

介之推焚殺



百里。居人不得設網羅。呼曰仁鳥。俗亦謂烏白臆者。爲慈鳥。則其類也。

周靈王

孔子生誕の  
奇瑞

麟王書を吐く

周靈王立二十一年。孔子生於魯襄公之世。夜有二蒼龍自天而下。來附徵在之房。因夢而生夫子。有二神女。擎香露於空中而來。以沐浴徵在。天帝下奏鈞天之樂。列於顏氏之房。空中有聲。言天感生聖子。故降以和樂笙鏞之音。異於俗世也。又有五老列於徵住之庭。則五星之精也。夫子未生時。有麟吐玉書於闕里人家。文云。水精之子。繼衰周而素王。故二龍繞室。五星降庭。徵在。賢明知爲神異。乃以繡紱繫麟角。信宿而騰去。相者云。夫子係殷湯水德而素王。至敬王之末。魯定公二十四年。魯人鋤商田於大澤。得麟以示夫子。繫角之紱尙猶在焉。夫子知命之將終。乃抱麟解紱。涕泗滂沱。且麟出之時。及解紱之歲。垂百年矣。

二十三年。起昆昭之臺。亦名宣昭。聚天下異木神工。得崆峒谷陰生之樹。其樹千尋。

昆昭臺の結構

君主は樂を  
獨占せず

文理盤錯。以此一樹。而臺用足焉。大幹爲桁棟。小枝爲榑桷。其木有龍蛇百獸之形。又篩水精以爲泥。臺高百丈。昇之以望雲色。時有萋宏。能招致神異。王乃登臺。望雲氣翥。忽見一人。乘遊龍飛鳳之輦。駕以青螭。其衣皆縹緞毛羽也。王即迎之上席。時天下大旱。地裂木燃。一人先唱。能爲雪霜。引氣一噴。則雲起雪飛。坐者皆凜然。宮中池井。堅冰可琢。又設狐腋素裘。紫羅文褥。是西域所獻也。施於臺上。坐者皆溫。又有一人唱。能使即席爲炎。乃以指彈席上。而暄風入室。裘褥皆棄於臺下。時有容成子。諫曰。大王以天下爲家。而染異術。使變夏改寒。以誣百姓。文武周公之所不取也。王乃疏萋宏而求正諫之士。時異方貢玉人石鏡。此石色白如月。照而如雪。謂之月鏡。有玉人。機戾自能轉動。萋宏言於王曰。聖德所招也。故周人以萋宏幸媚而殺之。流血成石。或言成碧。不見其尸矣。

人語に應ず  
る鏡

有韓房者。自渠胥國來。獻玉駝。高五丈。虎魄鳳凰。高六尺。火齊鏡。廣三尺。闔中



視物如畫。向鏡語。則鏡中影應聲而答。韓房身長一丈。垂鬚至膝。以丹砂畫左右手。如日月盈缺之勢。可照百餘步。周人見之如神明矣。靈王末年。亦不知所在。

燕昭王

王即位二年。廣延國來獻善舞者二人。一名旋娟。一名提嫫。竝玉質凝膚。體輕氣馥。綽約而窈窕。絕古無倫。或行無跡形。或積年不饑。昭王處以單綃華幄。飲以瑤珉之膏。飴以丹泉之粟。王登崇霞之臺。乃召二人。徘徊翔舞。殆不自支。王以纓縷拂之。二人皆舞。容冶妖麗。靡於鸞翔。而歌聲輕颺。乃使女伶代唱。其曲清響流韻。雖飄梁動木。未足嘉也。其舞一名縈塵。言其體輕與塵相亂。次曰集羽。言其婉轉若羽毛之從風。末曲曰旋懷。言其支體纏蔓。若入懷袖也。乃設麟文之席。散荃蕪之香。香出波弋國。浸地則土石皆香。著朽木腐草。莫不鬱茂。以燠枯骨。則肌肉皆生。以屑噴地厚四五寸。使二女舞其上。彌日無跡。體輕故

枯骨肉生す  
るの名香

淫樂の極致

二舞妓の行  
方

淫樂の心を  
以つて仙を  
求るの不可

也。時有白鸞孤翔。銜千莖穠。穠於空中自生。花實落地則生根葉。一歲百穫。一莖滿車。故曰盈車嘉穠。麟文者。錯雜寶以飾席也。皆為雲霞麟鳳之狀。昭王復以衣袖麾之。舞者皆止。昭王知其神異。處於崇霞之臺。設枕席以寢。遣侍人以衛之。王好神仙之術。元天之女。託形作此二人。昭王之末。莫知所在。或云遊於漢江。或伊洛之濱。

四年。王居正寢。召其臣甘肅曰。寡人志於仙道。欲學長生久視之法。可得遂乎。肅曰。臣遊崑臺之山。見有垂白之叟。宛若少童。貌如冰雪。行如處子。血清骨勁。膚實腸輕。乃歷蓬瀛而超碧海。經涉升降。遊往無窮。此為上仙之人也。蓋能去滯欲而離嗜愛。洗神滅念。常遊於太極門。今大王以妖惑惑目。美味爽口。列女成羣。迷心動慮。所愛之容。恐不及玉。纖腰皓齒。患不如神。而欲卻老雲遊。何異操圭爵以量滄海。執毫釐而廻日月。其可得乎。昭王乃撤色滅味。居乎正寢。賜甘肅羽衣一襲。表其墟為明真里也。



印度之道術  
家尸羅の異

怪異總て口  
中に入出す

七年。沐胥之國來朝。則申毒國之一名也。有道術人名尸羅。問其年云百三十歲。荷錫持餅。云發其國五年。乃至燕都。善術惑之術。於其指端。出浮屠十層。高三尺。乃諸天神仙。巧麗特絕。人皆長五六分。列幢蓋鼓舞。繞塔而行。歌唱之音。如真人矣。尸羅噴水為霧。暗數里間。俄而復吹為疾風。霧皆止。又吹指上浮屠。漸入雲裏。又如左耳出青龍。右耳出白虎。始入之時。纔一二寸。稍至八九尺。俄而風至雲起。即一手揮之。即龍虎皆入耳中。又張口向日。則見人乘羽蓋。駕鸞鶴。直入於口內。復以手抑脅上。而聞懷袖之中轟轟雷聲。更張口。則見羽蓋鸞鶴。相隨從口中而出。尸羅常坐日中。漸漸覺其形小。或化為老叟。或為嬰兒。倏忽而死。香氣盈室。時有清風來吹之。更生。如向之形。咒術術惑神怪無窮。

長壽國盧扶  
の純孝敦俗

八年。盧扶國來朝。渡河萬國方至。云其國中山川無惡禽獸。水不揚波。風不折

木。人皆壽三百歲。結草為衣。是謂卉服。至死不老。咸知孝讓。壽登百歲以上。相敬如至親之禮。死葬於野外。以香木靈草。瘞掩其尸。閭里助送。號泣之音動於林谷。河源為之流止。春木為之改色。居喪水漿不入於口。至死者骨為塵埃。然後乃食。昔大禹隨山導川。乃旌其地為無老純孝之國。

聖王母來朝

神蛾を以て  
九轉神丹を  
練る

九年。昭王思諸神異。有谷將子。學道之人也。言於王曰。西王母將來遊。必語虛無之術。不踰一年。王母果至。與昭王遊於燧林之下。說炎帝鑽火之術。取綠桂之膏。燃以照夜。忽有飛蛾。銜火。狀如丹雀。來拂於桂膏之上。此蛾出於員丘之穴。穴洞達九天。中有細珠如流沙。可穿而結。因用為珮。此是神蛾之火也。蛾憑氣飲露。飛不集下。羣仙殺此蛾。合丹藥。西王母與羣仙遊員丘之上。聚神蛾以瓊筐盛之。使王童負筐。以遊四極。來降燕庭。出此蛾以示昭王。王曰。今乞此蛾。以合九轉神丹。王母弗與。昭王坐握日之臺。參雲上可捫日。時有黑烏白頭。集王之所。銜洞光之珠。圓徑一尺。此珠色黑如漆。懸照於室內。百神不能隱。



千歲に一珠  
を生ずる黒  
蚌

其精靈。此珠出陰泉之底。陰泉在寒山之北。員水之中。言水波常圓轉而流也。有黑蚌飛翔來去。如五岳之上。昔黃帝時。霧成子遊寒山之嶺。得黑蚌。在高崖之上。故知黑蚌能飛矣。至燕昭王時。有國獻於昭王。王取瑤潭之水。洗其沙泥。乃嗟歎曰。自懸日月以來。見黑蚌生珠。已八九十遇。此蚌千歲。一生珠也。珠漸輕細。昭王常懷此珠。當隆暑之月。體自輕涼。號曰銷暑招涼之珠也。

秦

一眼睛を點  
じて畫虎忽  
ち活く

始皇元年。燕魯國獻刻玉善畫工名裔。使舍丹青以漱地。即成魑魅及詭怪羣物之象。刻玉爲百獸之形。毛鬚宛若真矣。皆銘其臆前。記以日月。工人以指畫地長百丈。直如繩墨。方寸之內。畫以四瀆五岳列國之圖。又畫爲龍虎。鸞翥若飛。皆不可點睛。或點之必飛走也。始皇嗟曰。刻畫之形。何得飛走。使以淳漆各點兩玉虎一眼睛。旬日則失之。不知所在。山澤之人云。見一白虎各無一目。相隨而行。毛色相似。異於常見者。至明年。西方獻兩白虎。各無一目。始皇發檻

宛渠氏の潛  
海舟

炎帝火食の  
燃料

視之。疑是先所失者。乃刺殺之。檢其胃前。果是元年所刻玉虎。迄胡亥之滅。寶劍神物。隨時散亂也。

始皇好神仙之事。有宛渠之民。乘螺舟而至。舟形似螺。沈行海底。而水不浸入。一名淪波舟。其國人長十丈。編鳥獸之毛以蔽形。始皇與之語。及天地初開之時。了如親觀。曰。臣少時躡虛卻行。日遊萬里。及其老朽也。坐見天地之外事。臣國在咸池日沒之所。九萬里。以萬歲爲一日。俗多陰霧。遇其晴日。則天豁然雲裂。耿若江漢。則有玄龍黑鳳。翻翔而下。及夜燃石以繼日光。此石出燃山。其土石皆自光徹。扣之則碎。狀如粟。一粒輝映一堂。昔炎帝始變生食。用此火也。國人今獻此石。或有投其石於溪澗中。則沸沫流於數十里。名其水爲無淵。臣國去軒轅之丘十萬里。少典之子。採首山之銅。鑄爲大鼎。臣先望其國。其金火氣動。奔而往視之。三鼎已成。又見冀州有異氣。應有聖人生。果有慶都生堯。又見赤雲入於鄆鎬。走而往視。果有丹雀瑞昌之符。始皇曰。此神人也。彌信仙術。



焉。

雲明臺の建築材料

始皇起雲明臺。窮四方之珍木。搜天下之巧工。南得烟丘碧樹。酈水燃沙。賁都朱泥。雲岡素竹。東得葱巒錦柏。漂巖龍松。寒河星柘。岍雲之梓。西得漏海浮金。狼淵羽墾。滌嶂霞桑。沈塘貝籌。北得冥阜乾漆。陰坂文梓。寒流黑魄。闕海香瓊。珍異是集。二人騰虛緣木。揮斤斧於空中。子時起工。午時已畢。秦人謂之子午臺。亦言於子午之地。各起一臺。二說疑也。

蘇秦張儀の苦學

張儀蘇秦二人。同志好學。迭剪髮而鬻之。以相養。或備力寫書。非聖人之言不讀。遇見墳典。行途無所。題記以墨書。掌及股裏。夜還而寫之。折竹爲簡。二人每假食於路。剝樹皮。編以爲書帙。以盛天下良書。嘗息大樹之下。假息而寢。有一先生。問二子。何勤苦也。儀秦又問之。子何國人。答曰。吾生於歸谷。亦云。鬼谷。鬼者歸也。又云。歸者谷名也。乃謂其術。教以干世出俗之辯。即探智內。得二卷。

鬼谷先生

說書言輔時之事。古史考云。鬼谷子也。鬼歸相近也。

趙高性異を現はす

秦王子嬰立凡百日。郎中趙高謀殺之。子嬰寢於夷望之宮。夜夢有人身長十丈。鬚髮絕青。納玉鬪而乘丹車。駕朱馬。而至宮門。云。欲見秦王子嬰。闢者許進焉。子嬰乃與言。謂子嬰曰。余是天使也。從沙丘來。天下將亂。當有同姓名。欲相誅暴。翌日。廼起。子嬰則疑趙高。囚高於咸陽獄。懸於井中。七日不死。更以鑊湯煮。七日不沸。乃戮之。子嬰問獄吏曰。高其神乎。獄吏曰。初囚高之時。見高懷有一青丸。大如雀卵。時方士說云。趙高先世受韓終丹法。冬月坐於堅冰。夏日臥於爐上。不覺寒熱。及高死。子嬰棄高尸於九達之路。泣送者千家。或見一青雀。從高屍中出。直入雲。九轉之驗。信於是乎。子嬰所夢。即始皇之靈。所著玉鬪。則安期先生所遺也。鬼昧之理。萬世一時。



漢高祖の寶劍

漢太上皇微時。佩一刃長三尺。上有銘。其字難識。疑是殷高宗伐鬼方之時所作也。上皇遊鄆沛山中。寓居窮谷裏。有人歐冶鑄。上皇息其傍。問曰。此鑄何器。工者笑而答曰。爲天子鑄劍。慎勿泄言。上皇謂爲戲言。而無疑色。工人曰。今所鑄鐵。鋼礪難成。若得公腰間佩刀。雜而治之。卽成神器。可以尅定天下。星精爲輔佐。以殲三猾。水衰火盛。此爲異兆也。上皇曰。余此物名爲七首。其利難儔。水斷虬龍。陸斬虎兕。魑魅罔兩。莫能逢之。斫玉鑄金。其刃不卷。工人曰。若不得此七首。以和鑄。雖歐冶專精。越砥歛鏑。終爲鄙器。上皇則解七首。投於鑪中。俄而烟焰衝天。日爲之晝晦。及乎劍成。殺三牲以釁祭之。鑄工問上皇。何時得此七首。上皇云。秦昭襄王時。余行逢一野人於陌上。授余云。是殷時靈物。世世相傳。上有古字。記其年月。及成劍。工人視之。其銘尙存。叶前疑也。工人卽持劍授上皇。上皇以賜高祖。高祖常佩於身。以殲三猾。及天下已定。呂后藏於寶庫。庫中守藏者。見白氣如雲。出於戶外。狀如龍蛇。呂后改庫。名曰靈金藏。及諸呂擅權。白氣亦滅。及惠帝卽位。以此庫貯禁兵器。名曰靈金內府也。

上皇七首を投ず

白氣寶庫の外に迸る

三皇以前を知る戴角被毛の人類

孝惠帝二年。四方咸稱。車書同軌。天下太平。干戈偃息。遠國殊鄉。重譯來貢。時有道士。姓韓名稚。則韓終之嗣也。越海而來。云。是東海神使。聞聖德洽乎區宇。故悅服而來庭。時有東極出扶桑之外。有泥離之國來朝。其人長四尺。兩角如蠶。牙出於唇。自乳已來。有靈毛自蔽。居於深穴。其壽不可測也。帝云。方士韓稚解絕國人言。令問人壽幾何。經見幾代之事。答曰。五運相承。迭生迭死。如飛塵細雨。存沒不可論算。問女媧以前可聞乎。對曰。她身已上。八風均。四時序。不以威悅。攬乎精運。又問。燧人以前。答曰。自燬火變。腥以來。父老而慈。子壽而孝。自軒皇以來。屑屑焉以相誅滅。浮靡囂動。淫於禮。亂於樂。世德澆訛。淳風墜矣。稚以答聞於帝。帝曰。悠哉杳昧。非通神達理者。難可語乎。斯遠矣。稚於斯而退。莫知其所之。帝使諸方士。立仙壇於長安城北。名曰祠韓館。俗云。司寒之神。祀於城陰。按春秋傳曰。以享司寒。其音相亂也。定是祠韓館。至二年。詔宮女百人。文錦萬疋。樓船十艘。以送泥離之使。大赦天下。

長安城北の仙壇



漢武帝李夫人之追憶

漢武帝思懷往者李夫人。不可復得。時始穿昆靈之池。泛翔禽之舟。帝自造歌曲。使女伶歌之。時日已西傾。涼風激水。女伶歌聲甚適。因賦落葉哀蟬之曲。曰。羅袂兮無聲。玉墀兮塵生。虛房冷而寂寞。落葉依於重扇。望彼美之女兮。安得感余心之未寧。帝聞唱動心。悶悶不自支持。命龍膏之燈。以照舟內。悲不自止。親侍者覺帝容色愁怨。乃進洪梁之酒。酌以文螺之卮。卮出波祇之國。酒出洪梁之縣。此屬古扶風。至哀帝廢此邑。南人受此釀法。今言雲陽出美酒。兩聲相亂矣。帝飲三爵。色悅心歡。乃詔女伶出侍。帝息於延涼室臥。夢李夫人授帝蘅蕪之香。帝驚起而香氣猶著衣枕。歷月不歇。帝彌思求。終不復見。涕泣治席。遂改延涼室為遺芳夢室。

夫人之靈武帝之靈香

少君李夫人之魂招

初帝深愛李夫人。死後常思夢之。或欲見夫人。帝貌顛頽。嬪御不寧。詔李少君與之語曰。朕思李夫人。其可得乎。小君曰。可遙見。不可同於帷幄。暗海有潛

夫人之像を碎き丸薬として飲む

背明國所産物の怪異な穀

英之石。其色青輕如毛羽。寒盛則石溫。暑盛則石冷。刻之爲人像。神悟不異真人。使此石像往則夫人至矣。此石人能傳譯人言語。有聲無氣故。知神異也。帝曰。此石像可得否。少君曰。願得樓船巨力千人。能浮水登木。皆使明於道術。齋不死之藥。乃至暗海。經十年而還。昔之去人。或升雲不歸。或託形假死。獲反者四五人。得此石。即命工人依先圖。刻作夫人形。刻成置於輕紗幕裏。宛若生時。帝大悅。問少君曰。可得近乎。少君曰。譬如中宵忽夢。而晝可得近觀乎。且此石毒。宜遠望不可逼也。勿輕萬乘之尊。惑此精魅之物。帝乃從其諫。見夫人畢。少君乃使舂此石人。爲丸服之。不復思夢。乃築靈夢臺。歲時祀之。

宣帝地節元年。樂浪之東。有背明之國。來貢其方物。言其鄉在扶桑之東。見日出於西方。其國昏昏常暗。宜種百穀。名曰融澤。方三千里。五穀皆良。食之後天而死。有浹日之稻。種之十旬而熟。有翻形稻。言食者死而更生。天而有壽。有明清稻。食者延年也。清腸稻。食一粒。歷年不饑。有搖枝粟。其枝長而弱。無風常搖。



一醉累月の  
奇酒

食之益髓。有鳳冠粟。似鳳鳥之冠。食者多力。有遊龍粟。葉屈曲似遊龍也。有瓊膏粟。白如銀。食此二粟。令人骨輕。有繞明豆。其莖弱。自相縈纏。有挾劍豆。其莢形似人挾劍。橫斜而生。有傾離豆。言其豆見日。葉垂覆地。食者不老不疾。有延精麥。延壽益氣。有昆和麥。調暢六府。有輕心麥。食者體輕。有醇和麥。為麴以釀酒。一醉累月。食之凌冬可袒。有含露麥。穗中有露。味甘如飴。有紫沈蕨。其實不浮。有雲冰蕨。實冷而有光。宜為油澤。有通明蕨。食者夜行不持燭。是苜蓿也。食之延壽。後天而老。其北有草名虹草。枝長一丈。葉如車輪。根大如穀。花似朝虹之色。昔齊桓公伐山戎國。人獻其種。乃植於庭。云霸者之瑞也。有宵明草。夜視如列燭。晝則無光。自消滅也。有紫菊。謂之日精。一莖一蔓。延及數畝。味甘。食者至死不饑渴。有焦茅。高五丈。燃之成灰。以水灌之。復成茅也。謂之靈茅。有黃渠草。映日如火。其堅韌若金。食者焚身不熱。有夢草。葉如蒲。莖如箸。採之以占吉凶。萬不遺一。又有聞遐草。服者耳聰。香如桂。莖如蘭。其國獻之。多不生實。葉多萎黃。詔並除焉。元鳳二年。於淋池之南起桂臺。以望遠

死灰の甦る  
靈茅

長さ三尺の  
白蛟

氣。東引太液之水。有一連理桂樹。上枝跨於渠水。下枝隔岸而南。生與上枝同一株。帝常以季秋之月。泛蘅蘭雲鷁之舟。窮晷係夜。釣於臺下。以香金為鈎。繡絲為綸。丹鯉為餌。鈎得白蛟。長三丈。若大蛇。無鱗甲。帝曰。非祥也。命太官為鮓。肉紫骨青。味甚香美。班賜羣臣。帝思其美。漁者不能復得。知為神異之物。

言語を解する  
鳥獸

二年。含塗國貢其珍怪。其使云。去王都七萬里。鳥獸皆能言語。雞犬死者。埋之不朽。經歷數世。其家人遊於山阿海濱。地中聞雞犬鳴吠。主乃掘取還家養之。毛羽雖禿落更生。久乃悅澤。

感孝の靈異

張掖郡有郅族之盛。因以名也。郅奇。字君珍。居喪盡禮。所居去墓百里。每夜行。常有飛鳥。銜火夾之。登山濟水。號泣不息。未嘗以險難為憂。雖夜如晝之明也。以淚灑石。則成痕。著朽木枯草。必皆重茂。以淚浸地。即醜。俗謂之醜鄉。



至昭帝嘉其孝異表銘其邑曰孝感鄉四時祭祀立廟焉。

後漢

蓬萊の靈瓜

明帝因貴人夢食瓜甚美。帝使求諸方國。時燉煌獻異瓜種。恒山獻巨桃核。瓜名穹隆。長三尺而形屈曲。味美如飴。父老云。昔道士從蓬萊山得此瓜。云是崆峒靈瓜。四劫一實。西王母遺於此地。世代遐絕。其實頗在。又說巨桃霜下結花。隆暑方熟。亦云仙人所食。帝使植於霜林園。園皆植寒菓。積冰之節。百菓方盛。俗謂之相陵。與霜林之聲訛也。后曰。王母之桃。王公之瓜。可得而食。吾萬歲矣。安可植乎。后崩。內侍者見鏡奩中有瓜桃之核。視之涕零。疑非其類耳。

雕陵の鵲

章帝永寧元年。條支國來貢異瑞。有鳥名鵲。形高七尺。解人語。其國太平。則鵲羣翔。昔漢武時。四夷賓服。有獻馴鵲。若有喜樂事。則鼓翼翔鳴。按莊周云。雕陵之鵲。蓋其類也。淮南子云。鵲知人喜。今之所記。大小雖殊。遠近為異。故略

舉焉。

一竹簡の富

安帝好微行於郊囿。或露宿起。惟宮皆用錦罽文綉。至永初二年。國用不足。令吏民入錢者得為官。有琅邪王溥。即王吉之後。吉先為昌邑中尉。奕世衰凌。及安帝時。家貧不得仕。乃挾竹簡插筆。於洛陽市傭書。美於形貌。又多文辭。來僦其書者。丈夫贈其衣冠。婦人遺其珠玉。一日之中。衣寶盈車而歸。積粟於廩。九族宗親。莫不仰其衣食。洛陽稱為善筆。而得富。溥先時家貧。穿井得鐵印。銘曰。傭力得富。錢至億度。一士三田。軍門主簿。後以一億錢輸官。得中壘校尉。三田一士。壘字也。中壘校尉。掌北軍壘門。故曰軍門主簿。積善降福。明神報焉。

千間の裸遊館

靈帝初平三年。遊於西園。起裸遊館千間。采綠苔而被堦。引渠水以繞砌。周流澄徹。乘船以遊漾。使宮人乘之。選玉色輕體。以執篙楫。搖漾於渠中。其水清澄。以盛暑之時。使舟覆沒。視宮人玉色者。又奏招商之歌。以來涼氣也。歌曰。涼



一莖四葉の蓮

内侍をして雞鳴をなさせしむ

太一の精劉向に學を授く

風起兮日照渠。青荷晝偃。葉夜舒。惟日不足。樂有餘。清絲流管歌。玉鳧千年萬歲。喜難踰。渠中植蓮。大如蓋。長一丈。南國所獻。其葉夜舒晝卷。一莖有四蓮叢生。名曰夜舒荷。亦云。月出則舒也。故曰望舒荷。帝盛夏避暑於裸遊館。長夜飲宴。帝嗟曰。使萬歲如此。則上仙也。宮人年二七已上。三六已下。皆觀粧解其上衣。惟着内服。或共裸浴。西域所獻茵墀香。煮以爲湯。宮人以之浴浣。使以餘汁入渠。名曰流香渠。又使内豎爲驢鳴於館北。又作雞鳴堂。多畜雞。每醉迷於天曉。内侍競作雞鳴。以亂真聲也。乃以炬燭投於殿前。帝乃驚悟。及董卓破京師。散其美人。焚其宮館。至魏咸熙中。先所投燭處。夕夕有光如星。後人以爲神光。於此地立小屋。名曰餘光祠。以祈福。至魏明末。稍掃除矣。

劉向於成帝之末。校書天祿閣。專精覃思。夜有老人。着黃衣。植青藜杖。登閣而進。見向暗中獨坐誦書。老父乃吹枝端煙燃。因以見向。說開闢已前。向因受五行洪範之文。恐辭說繁廣忘之。乃裂裳及紳以記其言。至曙而去。向請問姓名。

云。我是太一之精。天帝聞金卯之子有博學者。下而觀焉。乃出懷中竹牒。有天文地圖之書。余略授子焉。至向子歆。從向授其術。向亦不悟此人焉。

賈逵の穎悟

賈逵年五歲。明慧過人。其姊韓瑤之婦。嫁瑤無嗣而歸居焉。亦以貞明見稱。聞隣中讀書。旦夕抱逵。隔籬而聽之。逵靜聽不言。姊以爲喜。至年十歲。乃暗誦六經。姊謂逵曰。吾家貧困。未嘗有教者入門。汝安知天下有三墳五典。而誦無遺句耶。逵曰。憶昔姊抱逵於籬間。聽隣家讀書。今萬不遺一。乃剝庭中桑皮。以爲牒。或題於扉屏。且誦且記。昔年經文通。遍於閭里。每有觀者。稱云振古無倫。門徒來學。不遠萬里。或襁負子孫。舍於門側。皆口授經文。贈獻者積粟盈倉。或云。賈逵非力耕所得。誦經口倦。世所謂舌耕也。

魏明帝起凌雲臺。躬自掘土。羣臣皆負畚鍤。天陰凍寒。死者相枕。洛鄴諸鼎。皆夜震自移。又聞宮中地下有怨歎之聲。高堂隆等上表諫曰。王者宜靜以養民。今嗟



太山下の連  
理文石

附錄

八〇

嘆之聲。形於人鬼。願省薄奢費。以敦儉朴。帝猶不止。廣求瑰異。珍賂是聚。飾臺榭。累年而畢。諫者尤多。帝乃去。煩歸儉。死者收而葬之。人神致感。衆祥皆應。太山下有連理文石。高十二丈。狀如柏樹。其文彪發。似人雕鏤。自下及上皆合。而中開廣六尺。望若真樹也。父老云。當秦末。二石相去百餘步。蕪沒無有。蹊徑。及魏帝之始。稍覺相近。如雙闕土。王陰類。魏爲土德。斯爲靈徵。苑囿及民家草樹。皆生連理。有合歡草。狀如蓍。一株百莖。晝則衆條扶疏。夜則合爲一莖。萬不遺一。謂之神草。沛國有黃麟。見於戊巳之地。皆土德之嘉瑞。乃修戊巳之壇。黃星炳夜。又起昂畢之臺。祭祀此星。謂之分野。歲時修祀焉。

### 崑崙山

崑崙の風物

崑崙山。有崑崙之地。其高出日月之上。山有九層。每層相去萬里。有雲色。從下望之。如城闕之象。四面有風。羣仙常駕龍乘鶴。遊戲其間。四面風者。言東南西北一時俱起也。又有祛塵之風。若衣服塵汚者。風至吹之。衣則淨如洗濯。甘露

四翼の神龜

千年一度五  
臟を脱却す  
る白色龍

濛濛似霧。著草木則滴瀝如珠。亦有朱露。望之色如丹。著木石赭然。如朱雪灑焉。以瑤器承之。如飴。崑崙山者。西方曰須彌山。對七星之下。出碧海之中。上有九層。第六層有五色玉樹。蔭翳五百里。夜至水上。其光如燭。第三層有禾穞。一株滿車。有瓜如桂。有柰冬生如碧色。以玉井水洗。食之骨輕柔能騰虛也。第五層有神龜。長一尺九寸。有四翼。萬歲則升木而居。亦能言。第九層山形漸小狹。下有芝田蕙圃。皆數百頃。羣仙種耨焉。傍有瑤臺十二。各廣千步。皆五色玉爲臺基。最下層有流精。霄間直上四十丈。東有風雲兩師。聞南有丹密雲。望之如丹色。丹雲四垂。周密。西有螭潭。多龍螭。皆白色。千歲一蛻。其五臟。此潭左側有五色石。皆云是白螭腸化成。此石有琅玕璆琳之玉。煎可以爲脂。北有珍林。別出。折枝相扣。音聲和韻。九河分流。南有赤陂。紅波千劫一竭。千劫水乃更生也。

附錄

八



大正十三年十一月二十五日印刷  
大正十三年十一月二十八日發行

【非賣品】

著者 澁川柳次郎

發行者 立川雷平

東京市麻布區筈町百廿六番地

印刷者 猪木卓二

東京市麴町區飯田町二ノ五〇



製複許不

發行所

東京市麻布區筈町百二十六番地

立耳叢書刊行會

振替東京四〇四三五番

東京華印社印刷所印行



527

60<sub>11</sub>



終